2022年
7月15日発行
（通巻第18号）

〒604-8111京都市中京区
三条通高倉東入桝屋町57
京都三条ビル401A
公益財団法人
京都健康管理研究会
理事長　泉　孝英
制作担当　岡本吉朋
TEL 075-746-2123
FAX 075-746-2092

第三次世界大戦の終結

公益財団法人 京都健康管理研究会　理事長　泉　孝英

『第三次世界大戦』と題させていただいた理由は、ウクライナ紛争で、ロシア軍と戦闘しているのはウクライナ軍です。しかし、米欧がウクライナ軍への強力な武器調達を行っている以上は、事実上は、『米欧対ロシアの代理戦争』とみなすべきことだからです。ロシアは、ある程度の旧ソ連邦の復活に成功しなければ、鉾を収めることはないでしょう。

フィンランド、スウェーデンは、NATOへの加入を申請しました。背景には、第二次世界大戦にみせつけられたソ連兵の勇猛さがあると思います。しかし、NATO諸国も紛争が長期化すれば、いつまでも米国に追随するわけはないと思われます。

このような情勢で、中国が台湾解放を実行に移すことは必至でしょう。本来、『台湾は中国領土の一部である』に異議はないことです。台湾が平和的に中国に復帰できない場合、中国の軍事侵攻が起これば、米国が参戦する。しかし、ベトナムと同様、米国は敗退する。第三次世界大戦は終結する。この時点で世界の覇権を握るのはどこの国か考えるまでもないことです。

（京都大学名誉教授）

目　次

［留学］	英国と私（その１）英国留学のあとさき	山下純宏	2
［研究］	研究と趣味	橋本弘藏	10
［訪問記］	キエフ市立クリニカ第10病院訪問記 ―2009年11月―	二宮　清	14
［エッセイ］	フルトヴェングラーと私	田中　昭	19
	「世界旅」のスケッチ帖	玄番央恵	22
	宝塚少女歌劇　昭和13年～14年「日・獨・伊親善藝術使節」の足跡を辿って	飯島　健	29
	学会雑記 ―記憶に残る人―	渡辺貞一	37
	「叔父子」の祟り	大田高祐	42
	東京探訪記⑼ 東京の地形と神田川	四元秀毅	44
［追悼］	髙久史麿先生	泉　孝英	46
［本の紹介］	中島明雄訳：ぜんそくはもう怖くない		48
［新刊紹介］	浅本　仁：気管支喘息へのアプローチ		50
	吉中丈志編：七三一部隊と大学		51

［留学］

英国と私（その１）

英国留学のあとさき

山下純宏

背景

記憶の多くは時間と共に消退して行きますが、大きな感動と共に脳裏に刻まれた記憶は長く残っているものです。大変個人的でとりとめのないものですが、青年期に英国に学んだ半世紀年前の私のささやかな経験が、若い人達にとって何かの参考になりはしないかと思い、何回かに分けて書き留めてみます。

第二次世界大戦直前には、現在のロシアと北朝鮮が諸外国から非難されているように、「大日本帝国は狂っている」と欧米列強から非難され、国際連盟から経済制裁の対象にされたにも関わらず、それに反抗して日本は国際連盟から脱退し、東南アジアへ進出した結果として、第二次世界大戦が勃発しあの悲惨な原爆投下で終了する敗戦があったと言いえます。

父が福井県小浜市（当時はまだ遠敷郡小浜町）で女学校の教師をしていたため、私は1939年に小浜市で生まれました。1944年頃には近くに舞鶴軍港があったため頻繁に米軍機が襲来し、夜間自宅裏の防空壕に潜み敵機を探るサーチライトの光の線を恐る恐る眺めていました。幼稚園に通っていた私は、空襲警報が鳴る度に早退けで帰宅しました。ある日の昼頃、家へ帰る途中に米軍機の機銃掃射を受け、たまたま一緒にいた次姉に手を取られて、辛うじて道端の溝に避難したときの恐怖感は今でもマザマザと記憶しています。母はモンペ姿で婦人会の竹槍訓練に出かけていましたし、学徒動員で女学校生徒であった長姉は従軍看護婦として中国本土へ派遣され、中学生の兄は紙風船爆弾製造工場へ駆り出されました。その頃急に町のあちこちに朝鮮人が異様に多く住みつき、仕舞に私達の幼稚園の二階が彼らの住居として転用されました。結果として私達は窮屈な幼稚園生活を強いられました。急に生活風習が異なる人達が入り込んできたので、街では大人達の口論やいざこざが絶えませんでした。彼らには重い荷物は頭の上に乗せて歩く風習があったので一見して判りました。

戦況が厳しくなる中、私は本籍地である石川県津幡町（当時は河北郡笠谷村）の祖母の元に疎開しました。私のように幼少時に敗戦を迎え、昭和天皇の玉音放送を雑音の混ざるラジオでリアルタイムに聴いた世代は、今や80歳を過ぎた私達のような後期高齢者のみとなりました。

私は終戦の翌年、1946年に田舎の小学校へ入学しましたが、私のクラスの生徒数は17名でした。小学校の教科書は絵も写真もないモノクロで、用紙は灰色のチリ紙のような粗末なものでした。極貧の中でイタドリ、フキの葉、サツマイモの茎などを食べて飢えを凌ぎました。その頃、給食のために米軍から支給された脱脂粉乳は、味気ないものではありましたが何よりも有り難い賜り物でした。戦後に小学校時代を過ごした自分たちの世代にとっては、米国は「鬼畜米英」というよりは、

我々を救ってくれた「命の恩人」という印象を強く持って育ちました。1949年には湯川秀樹博士の日本人として初めてのノーベル賞受賞のニュースに、落ち込んでいた私達は大変勇気づけられました。敗戦以降の苦しい時代を何とか生き延びて、1964年の東京オリンピックを一つの到達目標として日本国民が一体となって努力した時代でした。

ブリティッシュ・カウンシル スカラシップ

私が、英国文化協会 ブリティッシュ・カウンシル（British Council, 以下 BC と略す）の国費留学生として英国スコットランドのエディンバラ大学（The University of Edinburgh）に留学したのは、京都大学医学部卒業後６年経ってからの２年間、1970〜72年（昭和45〜46年）のことでした。最初は１年間の予定で行き、延長を希望した結果、認められて計２年間滞在しました。丁度日米安保闘争や無給インターン問題に起因する大学紛争の真っ只中の頃でありました。私は米国空軍立川病院でインターンを終えて、丁度その頃新設された京都大学脳神経外科に同級生６名と共に入局しました。医局の先輩達の多くは、米国の大学の研究室のグラントで実験助手として１〜２年間雇って貰う形の研究留学で、同じ場所へ順番に留学するのが一般的な外国留学のパターンでした。留学先は殆どが米国で、英国へ留学したのは私が最初でした。私はインターン期間中に ECFMG (Examination Commission for Foreign Medical Graduates) 試験には合格していましたが、すぐに留学するよりは日本の医師国家試験に合格して、ある程度の専門分野の修行を積んだ後に外国留学をしたいと考えていました。

私が応募した1970年には BC 奨学生の日本への国別割当数は、日本の経済成長と共に段々と減らされて、英文学、神学、経済学、芸術、医学などの全分野を合わせて、合計30名程度で、医学部門から採用されたのは私一人でした。その頃、私は京都大学の大学院生の身分で静岡県三島市の国立遺伝学研究所細胞遺伝部に特別研究生として出入りしており、たまたま玄関の掲示板でこの BC 奨学生募集の情報を知り応募を決断しました。書類選考のあと、筆記試験、テープレコーダーを用いた英語ヒアリング試験が東京の新宿区神楽坂の BC Japan Office であり、その後に駐日英国大使館で面接試験がありました。面接官は駐日英国大使を含む４〜５名で、「何故英国へ行きたいのか」「英国で何をしたいのか」について、英会話能力を試す目的を兼ねてしつこく質問されました。推薦状は２通必要でした。先ず下宿の近くに住んでおられて、学生時代から個人的に面識があり、国立遺伝学研究所の特別研究生として推薦して頂いていた、著書「人類を主とした遺伝学」で有名な京都大学名誉教授（遺伝学）の駒井卓先生にお願いしました。先生は大学紛争で研究室が封鎖されている中で、「若者達が青春の貴重な時間を浪費しているのは惜しいことだ」と兼々嘆いておられたので積極的に留学を勧めて下さいました。２通目は、所属する大学院の指導教官である半田肇教授にお願いしましたが、「大学が学園紛争で、大変な時に現場を離れて外国留学とは何事か」と言ってなかなか推薦状を書いて貰えませんでした。そこで静岡労災病院の福光太郎先生の紹介で、当時は北野病院の院長をしておられた、学生時代の恩師でもある京都大学名誉教授（外科学）の荒木千里先生から頂きました。勿論このときには私は大学医局から脱退する覚悟でしたので、留学終了帰国後の日本への受入責任者は福光

太郎先生にお願いしてありました。

外国留学の必要条件

話は跳びますが、金沢大学教授在職17年間に、私の推薦状をもって外国留学をした教室員は全部で延べ15名います。留学先相手国は、米国６、フランス４、スウェーデン２、英国２、ドイツ１です。いずれの場合にも、こちらの責任者すなわち教授である私の「推薦状」が必須です。後輩達には、筆頭著者として英文原著論文を最低１編書くことを推薦状を書くための必要条件として提示していました。米国では予定の期限が来ても本国へ帰らない、いわゆる「不良残留外国人留学生」の存在が問題となっていました。その場合推薦状を書いた推薦人が責任を問われます。推薦状は決して軽々しく書けるものではありません。

外国へ留学することは、国際人としての人格形成に大変重要です。そこでの交友関係は将来の自分の活躍の舞台を大きく広げます。特に将来指導的立場に立つ意欲を持つ若者は、「チャンスがあれば留学したい」という意思を上司や周囲に表明しておくべきです。学位を持っていない医師が将来後輩を指導する立場に立たされたときに、もしも後輩から学位について相談を受けても、的確なアドバイスはできないでしょう。それと同様に、外国留学について相談を受けても、その経験がなければ的確なアドバイスはできないと思います。今後とも国際人として生きようと思っている若者にとって、読み書きのみならず、聞いて話す英語能力が極めて重要であることは、いくら強調しても強調し過ぎることはありません。

若い頃の２年間の海外生活は、カルチャーショックの連続であり、その経験は私のその後の人生に大きな影響をもたらしました。BC のスカラシップの場合、本人の滞在費のみならず、日本の自宅から英国の下宿先まで旅費はタクシー代まで含めて全額 refundable でした。1970年はまだ１ドル360円、１ポンド800円の時代で外貨の持出制限がありました。今思い返しても、物心両面で支援してくれた今は亡き義理の両親に対して感謝の念に堪えません。相応の目的が無い限り外国のビザを取ることは難しく、新婚旅行や卒業旅行などでは自由に海外へは出かけられない時代でした。留学生を送り出す側の日本にとっては外貨は持ち出させないように制限しますが、留学生を迎え入れる側からすれば、生活に支障を来さない程度のゆとりをもって外貨を持参してきて欲しいという事情がありました。BC 奨学生の場合には、渡英する際の国際航空便は必ず英国籍の BOAC（British Overseas Airways Corporation）を使うようにと指定されました。

イントロダクション・コース

英国の学年始めは９月です。BOAC の国際便で、途中アラスカのアンカレッジで給油して、ロンドンに到着しました。同じロンドン行の便で日本からの二人の BC 留学生と一緒でした。国際便で海外へ出るのは、勿論生まれて初めての経験でした。各国からの BC 留学生約50名と共に一緒にロンドンで、BC が設定した１週間位の合宿のような、「イントロダクション・コース」に参加しました。その頃は貨幣は10進法に変わる直前の頃であったので、１ポンドは20シリング、１シリングは12ペンスでした。その他にも、単位としてマイル、エーカー、フィート、ヤード、オンス、ガロン、パイント、などというややこしい単位が使用されていました。日本からの二人の友人は、グループ分けでバラバラになりまし

た。

ロンドン市内見物では、ビッグベンのある国会議事堂や赤い二階建てバス、いわゆるダブルデッカーを初めて見て感激しました。見学先としては他に、ナショナルギャラリー、ピカデリーサーカス、ロンドンブリッジ、ウィンザー城などが記憶に残っています。宿舎の部屋の水道水は飲料水と非飲料水の２系統に分かれていました。飲料水でも硬水なのでそのままではまずくて飲めないので沸かして料理や紅茶やコーヒーに使います。入浴用、洗濯用、トイレ用は蛇口の所に「not for drinking」とされていました。かつては植民地であったインド産の紅茶を、午前と午後に一回ずつのティータイムに飲むことは、英国人の生活の中に真に溶け込んでいます。病院にも各病棟の角にティールームがあり、ティータイムには各自自分用のカップを持ち寄りしばし世間話に花を咲かせていました。布製の保温用ティーポットコジー（カバー）を着せてある紅茶に濃厚なミルクを入れます。イングリッシュティーの本当の味わいはこの硬水でしか出ないようです。

イントロダクション・コースで教わった中で印象に残っていることの一つは、チップについての講話でした。タクシー、床屋、レストラン、この３つには10〜15%のチップを忘れずに払いなさいということでした。レストランでも紙ナプキンしか無いところや、請求書にサービス料込みと記載があれば、チップは不要です。しかし、重厚な布製のテーブルクロスがテーブル全体に掛かっているような所では、必ずチップを置きなさいと教わりました。給仕さんの給料は高くないのでチップが貰えないと生活ができないのだそうです。タクシーは全てオースチン製の黒の箱型です。客の数、荷物の個数によっても代金は変わります。チップを払い忘れていたり、金額が少な過ぎると、運転手はモジモジとして立ち去ろうとしませんでした。特に荷物が多くて運転手の横の助手席にも置くような場合には、更に余分にチップが要ります。ドアの開閉は日本のタクシーのように運転席で客の顔も見ずに遠隔操作するのではなく、運転手が外へ出て帽子を取って自ら丁寧にお辞儀をしながらドアを開けてくれます。最初はチップの習慣に慣れていなかったので、レストランでは正直言って「何かしら損したような気持」になりました。しかし、普通以上に特別親切に丁寧に何らかの余分のサービスを受けた場合とか、特別のサービスをこちらからお願いした場合には、感謝の気持を込めて相応のチップを支払うことは円滑な社会生活のための一種の知恵ではないかと、今は考えています。

イントロダクション・コース終了後、各自がそれぞれの英国内の留学の目的地に向かって散って行きました。1970年９月30日、私はキングスクロス駅から「Flying Scotsman」という名前の急行列車に乗り、７時間かけて目的地エディンバラに向かいました。

エディンバラの美しい街並み

エディンバラの Waverley Station には BC エディンバラ支部の若いスタッフが迎えてくれました。そして accommodation のこと、銀行口座開設、外国人登録、郵便局の使い方など、事細かく面倒を見てくれました。街へ出ると、Princes Street のあの美しい風景が私の目の中に飛び込んできました（図１）。

Waverley Station 近くから Princes Street を東から西方向を見ると手前の時計のある建物がバルモラルホテルで、その向こうのゴチック様式の建造物が Scott Monument です。ロンドンの二階建てバスは赤色でしたが、エ

ディンバラのそれはボルドーワインのような濃いエンジ色でした。家族を呼び寄せる前で、日本人の知人や友人は誰一人いませんでしたが、孤独感よりも解放感を感じていました。何からの解放かといえば、大勢の外来の鞭打ち症患者からの解放感と、学園紛争の不毛な論争からの解放感でありました。市内の3 Inverleith Row の GP（Genaral Physician）である Dr. George Miller Lamb のお宅の半地下の1LDK に居を定め、1ヶ月後に日本から妻を迎えることになりました。

図1　Princes Street の街並み

海外留学生制度

第2次世界大戦の戦勝国である米国や英国の留学生制度には、敗戦国日本の若者を自国流に教育して民主主義を叩き込み、自国贔屓にして帰国させて、将来の国際友好関係を確かなものにしたいという意図があったものと思われます。米国のフルブライト奨学金、英国の BC 奨学金がそれでした。ドイツのフンボルト奨学金にもおおよそ同じような意図が込められていたように思われます。日本政府が国費で文部教官向けに出している文部科学省の在外研究員制度がありますが、貰える確率は極めて低く宝くじ同然でした。奨学生にとっては経済的自己負担なしで外国で先進的学問を習得できるので、自分の将来の可能性を広げる絶好の機会でした。日本が国家として独立し経済復興を遂げ国力が付くにつれ、これらの留学生制度の日本への援助枠は縮小され廃止されて行きました。かつては京都にも BC 京都オフィスがありましたが、日本における BC のオフィスは現在では東京にある BC Japan Office のみとなりました。その頃のワーカホリックな日本人を揶揄する表現に、「ウサギ小屋に住むエコノミックアニマル」というのがありました。また羽田空港のモノレールの駅の壁には「遊べ遊べと世界がうるさい」という航空会社の大きな広告がありました。今から振返ると、あの頃の日本は国力が回復し、やや粗野でバブリーではありましたが最も勢いがあった時代のように思われます。

恩師ギリンガム教授との出会い

エディンバラ大学の Prof. Francis John Gillingham ギリンガム教授は、私が留学する年の数年前の1968年に東京で開催された日本脳神経外科学会総会に外国人ゲストとして招聘され、“The treatment of ruptured intracranial aneurysms”というタイトルで講演されました。彼はくも膜下出血の「警告発作」を初めて記載したことで有名な方でした。その後京都に立ち寄られ半田肇教授を表敬訪問されました。私が京都市内の案内役を務めたご縁もあり、典型的な英国紳士でしたので、機会があればギリンガム教授のもとに留学して本物の脳神経外科を勉強してみたいと願っていました。BC 留学生は英国国内であれば

好きな場所を留学先として選べましたので、私は迷わずにギリンガム教授のエディンバラ大学を選択しました。

エディンバラ大学の脳神経外科は Prof. Norman Dott ノーマン・ドット教授により1932年に開設されました。彼は脳神経外科の開祖といわれる米国の Dr. Harvey Cushing ハーヴェイ・クッシング教授の直弟子で、世界で初めて頭蓋内脳動脈瘤の直達手術を行ったことで有名な方です。私の滞在中にも杖を突きながらも時々カンファレンスに出席しておられました。

外国人の医師資格

研究留学ならば患者を診察しないので外国人としての医師資格は不要ですが、私は臨床の場でのトレーニングを希望しましたので、医師の資格登録をすることが必要でした。ECFMG の資格は米国向けのものなので英国では通用しませんでした。そのため時間を作ってロンドンの General Medical Council へ出頭して、Temporary Medical Registration（一時的医師免許）の手続きをして来ました。BC 留学生の身分であったので手続きは殆ど問題なく通過しました。同時に Medical & Dental Defence Union 医師・歯科医師保険組合に加入させられました。その頃、日本では医師の損害賠償保険加入はまだ一般的ではなかったので多少驚きました。Medical & Dental Defence Union の加入証明書がないと、患者には指一本触れてはいけないと言われました。

スコットランド銀行のポンド紙幣

日本でイギリスと言えば、おそらく半数以上の人がイングランドと同じものと思っているようです。ところが正式には、イギリスは「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」であります。日本からの郵便物の宛先には United Kingdom、略して UK を用います。イングランドとスコットランドではコインは共通でしたが、ポンド紙幣は銀行毎にサイズも絵柄も異なる紙幣を発行しており最初は戸惑いました。イングランド銀行のポンド紙幣はスコットランドでも問題なく使えましたが、スコットランド銀行の紙幣（図２）をロンドンで使用しようとすると、一般の小売店では断られることがあり使い勝手が良くないことが判りました。

図２　スコットランド銀行発行のポンド紙幣。絵柄は Sir Walter Scott

福祉国家としてのイギリス

「揺りかごから墓場まで」とは、かつて私達が学んだ「福祉国家イギリス」のイメージでした。第二次世界大戦直後に、保守党のウィンストン・チャーチルに代わって政権を取った労働党のクレメント・アトリー首相が、National Health Service（NHS）を施行して、いわゆる「福祉国家」を実現し、患者負担ゼロの画期的な国営医療制度を確立しました。一方で、規制強化や産業の国営化などによる産業保護政策は、英国の国際競争力を低下させ、経済成長を停滞させることになりました。また同時に、雇用や賃金が減少する中で、物

価が上昇するスタグフレーションが発生し、政策の綻びが経済学的にも指摘されるようになり、徐々にいわゆる「英国病」と言われる状態に陥って行ったのです（文献１）。それが私が留学した1970年頃の状況でした。

英国の国営医療（National Health Service, NHS）

英国と日本の医療制度の違いを正確に述べることは容易ではありません。日本医師会やマスコミは、日本の医療制度は「世界に誇る、フリーアクセス可能な「国民皆保険制度」と触れ込みますが、実は全国の病院の70％は民間病院であり、公的病院ですら独立採算制を取っているので、職員に給料やボーナスを支払うためには収益を挙げなければ成り立ちません。一方で日本の国民皆保険制度は、大部分は国の税金と保険料で支えられているので、たとえ民間病院でも高い「公益性」が求められる筈であります。コロナ禍のような感染症対応など公共政策上の重要課題を遂行するために、厚労相や知事の指揮下に入るように法律で位置付けられて然るべきです。今回のコロナ禍で日本政府の国家危機管理能力の脆弱さが改めて明らかとなりました。

誤解されやすいのは、英国のNHSでGPに登録した場合に、登録したGP以外のドクターには掛かれないならば、フリーアクセスが阻害されるのではないかという問題があります。しかし実際にはGPは、親子三代同じGPに掛かっているような、よろず相談係的な面もあり、必要があればGPにより適当な専門医を紹介して貰えるので、フリーアクセスできないことに対するクレームはありません。また、交通事故や急病の場合には大病院のAccident & Emergency Departmentを受診すればGPからの紹介状無しでも、24時間体制で受け付けてくれます。そこを退院する場合には必ずかかりつけのGPへ連絡が来ます。一旦登録したGPとどうしても馬が合わない場合には、その地区の郵便局へ行き、リストの中から別のGPに登録し直すことができます。逆にGPの側からも、GPに不快感を与える患者を拒否することができます。日本で言うところの「応召の義務」はありません。

日本の「国民皆保険制度」の問題点

日本の「国民皆保険制度」は決して英国のNHSのような「国営医療」ではありません。英国では自由開業はできません。NHSでは医業は世襲制ではありません。NHSでは患者に診療報酬を請求するという概念がありません。NHSでは病院は独立採算制ではありません。NHSでは医療費は出来高払いではありません。NHSでは医療従事者はすべて国家公務員なので、定員と定年があります。NHSでは医業で収益を挙げるという考えそのものがありません。NHSでは患者は退院時に原則お金を支払う必要がありません。したがって、NHSでは病院には治療費の計算をするための事務職員は要りません。薬剤に関しては医師から貰った処方箋を持って患者は街の薬局で薬を貰います。一律で多少の手数料は支払いますが薬価差益という概念もありません。コストパフォーマンスの余り良くない癌化学療法などへの取り組みは概して消極的です。NHSでは高齢者の人工透析の開始や、終末期の胃瘻などの延命治療は行われません。医療サービスは、教育と並んで、国民全体に提供される社会的共有資本（公共財）であるという考えが強いのです。医療従事者は学生の頃から、NHSの理念について学習し、公的医療において税金の無駄遣いはしないように徹底的に教育されているようでした。英国民はNHSを

誇りに思っており、またこの制度を愛しているようでした。NHS には私的企業が入り込む余地は全くありませんが、莫大な公的事務予算が割かれていることは明らかです。一方で入院待ちのウェイティングリストが長くなると、ロンドンのハーレイ・ストリートに代表される「自由診療」を自費で受ける患者も出てきますが、国民の医療の90％を NHS がカバーしています。ヨーロッパを観光中の旅行者が怪我や病気になった場合には、無料の治療を受けるために英国にやってくるという話も耳にしました。私達のような外国人留学生も治療費は無料でした。NHS が EU 在住の外国人労働者によって濫用されていることが BREXIT 賛成論者の論点の１つになったようでした。

日本と英国は、対 GDP 比同じく10％弱程度の総医療費を使っています（文献２）。無駄を省き効率よく使えば、日本の社会保障制度はもっと優れたものにすることができるはずです。人口が減少し、高齢化が更に進めば、いくら国債を増やしても、国家財政は破綻の方向に進んで行くリスクがあります。行政が積極的に介入して、フリーアクセスをある程度制限した「かかりつけ医」の GP システムの導入、中小病院の統廃合、統一性のあるデジタル化と医療データの共有、医師の地理的偏在の是正、診療科の偏在の是正に対して大胆に舵を切るべきものと、私は考えます。

英国と米国における医療制度の違い

1979年にマーガレット・サッチャーを首相とする保守党政権が誕生すると、国営の水道・電気・ガス・通信・鉄道・航空などの事業を民営化して、政府の経費を削減する政策に転換しました。いわゆる社会民主主義から新自由主義への転換であります。医療サービスにも市場原理を導入することで公的医療費を抑制し、サービスの効率化を目指しました。これが病院の人手不足に繋がり、病院は常に混雑し、診断を受けるのに数週間かかり、更に診断から実際の治療までの待機時間の長期化が深刻となりました。NHS の基本路線は守られましたが、医師不足のため距離的に近いドイツの若い医師が週末に英国へ当直アルバイトに出張して来るという話を聞いたことがあります。その後のブレア労働党政権時には医療費の国家支出を1.5倍に増やして、長期待期リスト問題について改善が進み、概ね GP 受診は２日以内、救急医療は４時間以内に受診できるようになったようです。

近代民主主義国家の代表格である米国と英国では、医療福祉制度が全く異なります（文献３）。簡単に言えば、費用は国家が全部税金で賄うという英国と、「富裕層と貧困層では受ける医療サービスも異なって当然」と考える米国です。米国の医療政策は弱者救済という観点は薄く、良い医療を受けるためには先ず稼ぎ、高い民間医療保険に入りなさいという考えが前面に出ています。

私が実体験した英国における医療事情と脳神経外科の臨床については、次回に述べたいと思います。　　（金沢大学名誉教授）

《文献》
１）君塚直隆：よくわかるイギリス近現代史．ミネルヴァ書房、2018
２）田畑雄紀：イギリス医療保障制度の概要―日本の制度との違いについて―. 関西大学経済政治研究所 財政・社会保障制度制度研究班 第196回産業セミナー p37~48, 2012
３）近藤克則：「医療クライシス」を超えて―イギリスと日本の医療･介護のゆくえ．医学書院、2012

［研究］

研究と趣味

橋本弘藏

１．学生時代

子供のころから遠くの放送局や海外放送を聞くことや、電子工作が趣味だった。寺町の電気街で部品を買ったりして、ワイヤレスマイクやFMステレオ受信機、オーディオアンプ等を組み立てた。アマチュア無線にも興味を持ち、高一で開局した。京都市立西京高校で、物理部に入部した。顧問の藤本大八先生に非常に感化され､｢頑張ればみんな京大に受かるよ」と言って先輩も紹介して下さり、その気になった。普通科と商業科があった西京高校は商業高校に制度が変わったため、２年生からは堀川高校に移った。

京都大学工学部電気工学科に1965年に入学した。部活は、クラシックギター部で、FM放送で聞いたギターが気に入ったからである。

卒業研究では、無線通信が専門の前田憲一教授の研究室に入った。研究テーマはアマチュア無線で使われている送信機を組み立てて実験ができるテーマを選んだ。指導教官は、助手２年目の松本紘先生である。後に京都大学総長になられた。非常に面倒見が良く、研究指導は勿論､暇を見て卓球も教えて頂いた。この研究は、ガラス管内にプラズマを作り、その中での電波の伝わり方や、別の電波が作られたりする事を研究する。趣味が研究上必要な装置製作などに役だった。この研究室では、宇宙科学研究所（ISAS）の内之浦でのロケット実験や人工衛星を使って、電離層やその上の磁気圏と言われる領域での電波に関する実験も行っており、宇宙との関りを持つことになる。

理論計算等で、大型計算機センターも利用するようになった。マニュアルをじっくり読んで変わった使い方もした。４階には、FACOM270-30というグラフィックディスプレイを備えた中型の計算機がある。計算結果のグラフを画面やXYプロッタに出力できた。ユーザー自ら操作し、紙テープ（ブートローダー）を読ませると計算機がスタートするのが面白かった。これも計算機が好きになった一因である。海外の学会は米国地球物理連合（AGU, American Geophysical Union）に加入した。

博士課程では、前田教授の後任の木村磐根教授のご指導の下で、先生が始められた磁気圏や電離層中の電波の伝わり方を追跡するRay Tracing（ゲーム等で使われる光を追跡するものとは異なり、磁化プラズマ中での電波伝搬を扱う）を中心に、理論計算や衛星観測結果等用いた研究をした。この期間に社会科学のための統計パッケージ（SPSS）を京都大学でも使えるようにするお手伝いをした。計算機センターでは､プログラム相談員として、利用者のデバッグの手助けなどもした。

２．京都大学助手・米国留学

1974年、木村研究室の助手となることができた。｢じきけん」衛星の観測機器製作、打ち上げ､データ解析等が研究テーマに加わった。

この頃の科学衛星のデータ解析は、ISAS に磁気テープを持参して、コピーをすることから始まる。海外留学は、松本先生のご紹介で、ワシントン郊外のメリーランド州にある NASA Goddard Space Flight Center（GSFC）で Melvyn Goldstein 博士の下、「ボイジャー」で観測された木星電波（木星から出る短波帯の電波で、地球でも受信できる）の研究を行うこととし、米国の NRC（National Research Council）に応募した。無事認められ、1981年11月に渡米した。

オーロラキロメータ放射（AKR）と呼ばれる地球から出る電波は以前から論文も読んでいたが、木星という初めてのテーマを最新のデータや本、論文で勉強や研究をすることができた。図書館に行けば、論文の他に NASA-TM（Technical Memorandum）という資料も多くあり重宝した。多くの TM は、今ではインターネットで入手できる。論文等で知っている多くの研究者がおられ、気軽に質問できる素晴らしい環境であった。木星観測結果の解釈のために Ray Tracing を行うことになった。部門で持っている VAX VMS コンピュータにある地球の電離層用プログラムは、ソースプログラムの内容も詳しく記述したマニュアルが完備していたので、これを木星用に改造して計算を行った。実際に扱ったのは、「ボイジャー」ではなく長期にわたる地上観測の結果であった。ほぼ毎週、昼食のサンドイッチなどを食べながら、Brown bag seminar で色んな講演を聞くことができ、自ら講演も行った。

夏頃に論文に纏めて投稿することができた。そこで、従来から衛星観測等で成果を挙げていたアイオワ大学の Donald Gurnett 先生に連絡を取り、講演をさせて頂けることになった。この研究グループは、Van Allen Hall 内にあり、講演は、Van Allen 先生も聞いて下さったのには驚いた。2泊3日であったのに、Gurnett 先生はじめ後に共同研究を行う Wynne Calvert 先生と Roger Anderson 先生のお宅にも呼んで頂いた。これらの方々のみならず、多くの研究者との交流が貴重であったことは、言うまでもない。

次の衛星の準備が始まるという事で、1983年の2月に帰国することになった。帰国後は、「あけぼの」衛星および日米共同の「GEOTAIL」衛星の観測装置の開発に関わった。地球から出る AKR では、日米の衛星で観測される電波の偏波が異なることが問題になっていた。帰国直前に、米国の衛星で両方の偏波が観測されていることを知り、帰国後この現象を説明する論文を出すことができた。留学中は、講演を聞いたり議論をする機会も多く、貴重な情報や体験が得られた。その後、地球から出る電波が研究の中心になった。研究室にとっては新しいテーマである。

3．東京電機大学

1985年に私立の東京電機大学工学部電気工学科に助教授（1989年に教授）として移った。神田にあったが、夜間の二部もあり、本務多忙で ISAS や学会に行く時間は限られたものになった。衛星の開発は「GEOTAIL」の高周波部分だけ続けた。1986年には、アイオワ大学で Calvert 先生と Gurnett 先生の観測データを解析させて頂き、1989年電機大に教授として来られた Calvert 先生と共著論文を書いた。10歳上だが色んな事に詳しく、親しく接して頂いた。

新たなテーマを探していた1987年頃、学会で松本先生に相談する機会があった。その際、先生が座長をされている「情報のパーソナル化と無線通信に関する研究会」を紹介して頂

き、オブザーバー参加することになった。コンピュータに無線と通信を加味したパケット無線を扱っていた。コンピュータネットワークに興味を持つことになり、研究テーマに加えた他、後に大学の計算機センターも担当することなった。面白かったが忙しくなった。無線ネットワークは、まだ研究者が少ない時代であったが、企業はじめ多数が参加することになり、やがて急速に進歩した。

4．再び京都大学

1995年に京都大学に教授で戻ることになった。工学部ではなく、宇治にある超高層電波研究センター（2000年に宙空電波科学研究センター、2004年に生存圏研究所に改組）である。センター長は松本先生である。磁気圏の波動現象の解析を中心とする地球物理的研究を継続した。客員教授に Calvert 先生をお呼びし、「GEOTAIL」衛星で新しい波動現象を見つけることも出来た。海外留学のお陰である。その後、他の衛星でも同様の現象が見つけられた。なかでも、Gurnett 先生の弟子で年齢が近く Ray Tracing 等で研究仲間である NASA/GSFC の James Green 博士は、「IMAGE」衛星でこの波動の源と思われるところを見つけた。一緒に共同研究も行ったが、2006年 NASA 本部 Director of the Planetary Science Division に、2018年には NASA 最上級の科学者である Chief Scientist になり、最近引退された。

1996年、センターに全国共同利用設備として、マイクロ波エネルギー伝送実験装置が導入されることとなった。電波暗室と実験装置を中心としたマイクロ波エネルギー伝送や宇宙太陽発電所（SPS, Solar Power Satellite）をはじめとする電波応用の実験を目的としている。SPS というのは、1968年に米国の Peter Glaser 博士が提案された、静止衛星の軌道で太陽光発電を行い、得たエネルギーをマイクロ波で地上に送り、それを電気に変えて利用するものである。原子力発電所と同じ位の100万kW程度の電力を得る。炭酸ガスは建設時しか出さず、大気や天候の影響を受けない。太陽電池から地上の８～10倍程度の電力が得られる地球温暖化対策に相応しい電力源である。これを機会に社会との関わりが深い SPS が研究テーマに加わった。退職までアンテナ関係を中心に研究を行った。

5．国際電波科学連合（URSI, Union Radio-Scientifique Internationale）

松本先生の勧めで1993年の URSI 京都総会に初めて参加した。URSI には、以下の10の分科会がある；1. 電磁波波計測(A)、2. 電磁波(B)、3. 無線通信システム信号処理(C)、4. エレクトロニクス・フォトニクス(D)、5. 電磁波の雑音・障害(E)、6. 非電離媒質伝搬・リモートセンシング(F)、7. 電離圏電波伝搬(G)、8. プラズマ波動(H)、9. 電波天文学(J)、10. 医用生体電磁気学(K)。広い分野の電波科学を扱っており、非常に興味を持った。H分科会に属し、そこでの発表やオーガナイザーにもなった。総会は３年毎だが、1999年に松本先生が President になられ、総会の間の年にアジア太平洋地区で開催することになり、AP-RASC’01（Asia Pacific Radio Science Conference 2001）が東京で開催されることになった。その Union Session は「SPS と無線電力伝送」がテーマになり、オーガナイザーの一人に任ぜられた。SPS は広い分野が関わるので、総会毎に複数の分科会合同のセッションを開催し、広い分野の講演が集まるよう努めた。

また松本先生を Chair に、幹事となって SPS

ICWG（Inter Commission Working Group）も作った。SPS は全てに関わっており、2005年には全ての分科会がメンバーになった。松本先生が President の時に、賛否両論を取り入れることを条件に URSI で SPS 白書を作ることになり、それを纏めるように仰せつかった。合同セッションの講演者や ICWG の委員を通じて各分科会の専門家に執筆を依頼し、松本先生とも相談しつつ、京大グループを中心に、足りない分は自ら執筆し、編集を行った。多くの分野の60名を超える方々に協力して頂いて、2007年に白書のドラフトが完成した。結局、白書本文は別途 Board メンバーで作られ、2007年機関誌 Radio Science Bulletin に発表された。我々が作った部分は Supporting Document となった。PDF 版は以下にある。

https://www.ursi.org/files/WhitePapers/WPSPS-ReportMin.pdf

中国も SPS の開発に熱心であるが、驚いたことに、2013年に中国語訳も出版されている。

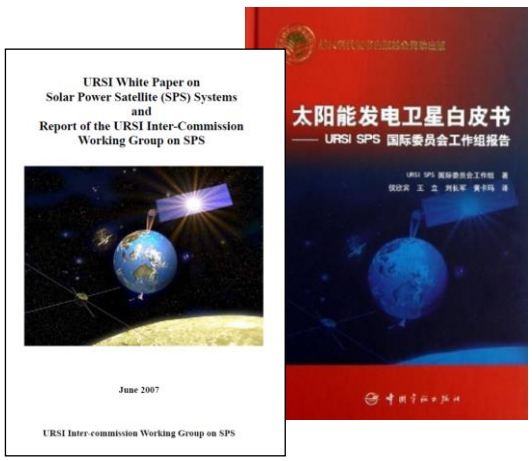


図１．USRI SPS 白書と中国語版

６．退職後

2010年の退職後しばらくして、中央診療所で健康診断の帳票作成や診断結果の解析等、ソフトウエア関係のお手伝いをさせて頂いている。Excel は長く使ってきたが、VBA（Visual Basic Application）という有用なソフトも使っており、プログラミングも楽しんでいる。VBA をこれまで知らなかったのが残念である。

最近は、科学衛星のデータもインターネットを使って自宅で入手できる。現役時代は、観測装置を作ってきたが、2016年に打ち上げられた「あらせ」衛星のデータを見せて貰ったところ面白い現象が見つかった。自宅の PC でデータを処理し、若い人たちの協力も得て、Letter および Paper を AGU から出版することができた。その他、電子装置等を設計製作している友人と、無線電力伝送関連の試作やシミュレーション等も行っている。

なお、2004年から長井苑子先生の呼びかけで、年代の近いギター部 OB・OG を中心に合奏や重奏を行うようになった。30年以上弾いていなかったギターもやがて弾けるようになり、毎月楽しい同窓会を続けている。若い時にやっていたからできた事である。

海外留学は、新たな研究テーマを見つけることができ、知己が増えたおかげで、共同研究のきっかけにもなった。最近は、退職しないと留学ができない事もあるとか。長期的には、本人のみならず日本にとっても損失であろう。

７．むすび

これまでを振り返って、電子回路やソフトウエアを作る趣味を生かし、楽しみながら研究や老後の仕事を行ってきたことを実感する機会を頂けたことを感謝いたしております。

なお、大学で撮って頂いた最終講義の記録が YouTube にアップされています。「橋本弘藏」で検索可能です。

（京都大学名誉教授）

［訪問記］

キエフ市立クリニカ第10病院訪問記

―2009年11月―

二宮　清

キエフは1991年ソ連邦から独立した新生ウクライナの首都であり、現在300万の人口を有し、高層ビルが建ち並ぶ近代的大都会であると同時に、1000年の歴史を有する東スラブ随一の古都でもある。町の歴史は10世紀に始まり、後のロシア国家群の源にあたるキエフ・ルーシ（キエフを都とするロシア＝東スラブ）公国の首都に選ばれたのである。ドニエプル川左岸に広がる市街地を高層ビルから眺めると、河岸やコンクリートでできた町並から一段高い丘に緑の眺望が見える。常緑樹の木立の間から、天に向かって突き出た黄金色に輝く教会の尖塔が目を引く。十字架が突き刺さった尖塔の屋根部分はドーム状の王冠に似ており、黄金色や濃青色に表面が塗られ、尖塔を載せた建物の白壁は黄金色の装飾品で縁取られ、教会全体の荘厳な雰囲気をかもし出している。キエフの教会群はユネスコの世界遺産に登録されており、私が訪れた日、ミサが開かれたホールは多数の信者で埋まり、町全体のキリスト教信仰の深さを物語っていた。

紀元前1500年にキンメリア人が黒海沿岸に進出したのが東スラブにおける国の始まり、幾多の民族の興亡を経てウクライナの源流となるキエフ・ルーシ公国が建国されたのが10世紀である。公国はモンゴルの侵攻により衰退し、東スラブの中心はモスクワに移り、20世紀のソ連邦解体後の新生ウクライナ成立まで国を失うことになる。この間、ウクライナの地はコサックダンスで知られるコサック（個人の自由を象徴する呼称）の進出、帝政ロシアからソ連邦へと組み込まれ、長く忍従を強いられた。現在のウクライナは、北はベラルーシ、西はポーランド・スロバキア・ハンガリー、南はルーマニア・モルドバ・黒海、東はロシアに接し、面積は約60万平方キロメートルで日本の約1.6倍、ヨーロッパではロシアに次ぐ第２位の広さである。国土のほとんどは平坦な丘陵地で、中央を縦断し黒海に注ぐドニエプル川の流域は、肥沃な黒土地帯を形成しヨーロッパ有数の穀倉地帯になっている。人口は4,500万を超え、８割がウクライナ人、２割がロシア人で、言語は西部が公用語であるウクライナ語、東部がロシア語、宗教はキリスト教のウクライナ自治独立正教とロシア正教である。

現代ウクライナの医療事情を知るうえで欠かすことのできない出来事は、ソ連邦時代の1986年に起きたチェルノブイリ原発事故である。放射能は8,000キロ離れた日本にも飛来し、当時の新聞に「日本の牛乳は飲んでも安全か？」と報道されたのを思い出した。

現地は、半径30㎞の範囲と300㎞はなれていても高度汚染地域は永久に居住禁止となり、40万以上の人々が故郷を失った。事故直後からがんや白血病が多発し、重大な健康被害を与えて来た。20年を経た今日、ウクライナ人の死亡原因の高位にがんが占めている事実から、深刻な影響は続いているとの指摘もある。

ウクライナの医療費は国民総生産の約６％、公的医療機関は無料でかかれるが、近年富裕層を対象とした有料の私的医療機関が開設され、総病床数40万床、医師12万人、看護師15万人、手術症例も600万例に達している。ウクライナには11の医科大学があり、毎年1,200人が卒業する。６年間の医学教育の後、３年間のレジデント終了後に医師開業権が授与され、専門医資格取得にはさらに４年間のトレーニング期間が必要とされる。医師の70%は女性であり、病院幹部にも多数登用されている。公務員の医師および看護師の月収は300から180ドルで、職種内賃金格差は小さく、他業種の給料ともたいして変わらず、医療先進国ほど高くない。医療従事者は物を生産するわけではないため、農・工業従事者ほどには尊敬されず、地位も高くはないので医師や看護師の志願者は不足している。

ウクライナ人の死亡原因は、「アルコール多飲の国民性やストレスによる心臓血管病、がん、特に肺がんや消化器がんが多く、がん患者の大多数は進行がんで見つかるので、先進国のように早期がんの治療にまでは手が回らない」と説明を受けた。さらに、「ウクライナでは10代から20代の肺がん患者もいて、若年者のがん患者も珍しくはない」と語ってくれた。日本では肺がんはほぼ老人の病気だが、ウクライナの若年者がん患者は、どうも喫煙単独の影響だけでなく放射能汚染などの影響も疑われる。ウクライナの穀倉地帯を流れるドニエプル川の上流にはチェルノブイリ原発事故による放射能汚染地域がある。ウクライナの肺がんにおける標準的抗がん剤治療は日本と大差はないが、新しい抗がん剤の種類は少なく、特にイレッサなどの高額な分子標的治療薬は実地の治療には使用されていないようだった。その他に深刻な感染症も多く、「特に薬剤の効かない結核、エイズも近年増加している」と説明を受けた。

私の訪問した2009年11月は、北半球で新型インフルエンザが猛威を振るい、ウクライナではインフルエンザが爆発的に増加した時期であった。出発数日前の現地情報では、「インフルエンザによる入院患者数93,866人、死亡者数374人、つい１週間前までの死亡者数200人弱が短期間で180人増加し、死亡した２人の肺は炭のように真っ黒で、今回のウィルスは大変危険」と報道されていた。当時、美貌の（美女すぎると評判の）ティモシェンコ首相が、マスクにガウン姿で、インフルエンザの出血性肺炎で死亡した患者の病院を訪問した際の写真を見た時には、さすがに一瞬行くのをためらった。しかし日程は変更できず、現地で感染・発病した際にインフルエンザ治療薬が手に入るか不明なため、とりあえず自宅にあったタミフル（期限切れ？）をかき集めマスクと共に持参した。ところが、キエフに到着すると誰もマスクをしておらず、後でわかったが、現地はすでにピークを過ぎていた。

キエフに到着した日は霧雨で雪は降っておらず、予想したほど寒くはなかった。これも温暖化の影響か？ 街並みは日本の大都会と同じく、高層ビルや、オフィスビル、ショッピングセンターが建ち並び、コカコーラやマクドナルドなどのファストフード店の看板もあった。日本食の店“むらかみ”の看板もあり、どうも作家“村上春樹”から借用したらしく、ロシア語に翻訳された日本人作家の中では一番の有名人だそうだ。街を歩いたが、高齢者の姿はほとんど見かけず、「平均寿命が日本に比べて15〜20歳ほど短く、男性62歳女性68歳なのですよ」と説明され納得した。

街では男性より女性の姿が多く、特に若い女性はきれいであるが、年配になると男女とも肥満が目立つ。寺院など観光地の入り口には、服装の小ぎれいな老女の物乞いがいたが男性の物乞いはいない。「物乞いもどうして女性ばかりが多いのか？」と尋ねたところ、「ウクライナで働いているのは女性です。男は家でアルコールばかり飲んでいます。なかには母親の年金で生活している息子もいますよ」との返事だった。一瞬“うらやましい！”と思ったが、“国民の半分が働かなければ国がつぶれてしまう”と考え直した。通訳は続けて「それでも、ウクライナ人の生活テンポはゆったりしており、物質的に豊かでなくとも精神的にはそれなりに満足はしていますよ」と説明されたのを聞き、資本主義の物質文明に無意識に毒されている自分の考えを深く恥じた。

ウクライナはヨーロッパの穀倉地帯だけあって農産物は豊富で、ホテルのメニューにも野菜、肉、乳製品がふんだんに取り入れられ、新鮮な牛乳も並べられた。訪問時期が晩秋のため青果は少なかったが、有名なクリミア産のワインが飲めた。入国前は農産物の放射能汚染が気になったが、だからと言って他に食べるものはなく、実際食べてみるとおいしかったので放射能汚染の件はすぐに忘れ、連日おなか一杯食べて飲んだ。帰国後、抜け毛が増えたような気もするが…？ ちなみに日本での“ボルシチ”は、肉や野菜が豊富に煮込まれたロシア料理のメインディッシュになっているが、本場で出されたボルシチは和食の汁物に相当する具の少ないスープで、各家庭ごとに違った味付けになっている。飲料水は炭酸入りが主で炭酸抜きは高く、しかもホテルの水は飲めない。エアコンは三菱製、テレビは韓国のサムスン製、英語放送は入るが日本語放送は入らない。

図１ 病院のレストラン正面玄関、前列左端からドブシェ院長、副院長、筆者、筆者の息子、内科部長、肝臓科部長、右端は看護部長、後列は通訳

クリニカ第10病院を表敬訪問した。病院の玄関にあたる管理棟は風格が感じられる伝統的建築様式であった（図１）。一般内科370床、外科100床、小児科50床、産婦人科150床、80歳以上の高齢者が入る病棟50床を備えた合計700床以上ある総合病院である。特に外科は腹部に専門特化しており、キエフ市全体から患者が集まって来る。年間400例以上の肝臓・胆嚢・膵臓の手術を執刀するドロノフ博士に会い、病院内を見学させてもらった。院内にある設備は古く、ベッドは現在の日本ではまず使っていないような代物で、パイプのペンキもはげ落ちサビも目立ち、ほとんどのベッドは可動式ではなく、電動ベッドはごく限られた区域にしかない。

ウクライナの一般的な公的病院における医療設備の説明を受けたが、現在の日本と比較すると圧倒的に診断・治療機器が不足している。ちょうど私が医師になった1970年代後半の日本と同水準である。当然、CT や MRI 装置は各病院にはなく、キエフ市内の診断専門のセンターにしか設置されておらず、アクセスも悪く簡単には利用できそうにない。訪問先の医者から、「PET 診断装置を知っているか？ 見たことがあるか？」と尋ねられたこと

から判断すると、ウクライナ国内には数台程度しかないのであろう。もちろん、彼らは見たこともないようだった。これら大型医療機器の保守・点検や修理は、「ドイツなどメーカーの本社がある外国からの出張で対応している」と説明を受けた。病院内に設置されている医療機器を実際に見たが、X線撮影室は20畳はあろうかというくらい広いが、日本ではすでに使われていない旧式の単純X撮影装置が3台、装置ごとの仕切り板もなく設置され、次々と撮影をしていた。原発事故があった国にしては、医療現場における放射能防護の意識は低いようだ。その他、オリンパス社製の上部と下部消化管内視鏡装置が1台ずつ、今の日本では旧式となった心臓・腹部兼用エコーと心臓専用エコー装置が各1台ずつ大切に使用されていた。洛和会ヘルスケアシステムが贈った心臓・腹部兼用エコーも大活躍していた。救急外来にある医療機器は心電図1台のみであり、診断用医療機器の不足は明らかであった。しかしながら、ウクライナとの医療交流を経験したアメリカ医師団は、「診断用医療機器の不足状態に置かれたウクライナ医師の身体診察に基づく診断能力は、アメリカの医師より優れており、診断に到達するまでに多くの検査は必要としなかった」と報告書に記載している。

血液や尿などの検体を扱う検査室は病院敷地内の別棟にあり、訪問時に女性技師がピペットを使って仕事をしていた。一般に手作業で検査が行われるらしく、自動的に多数の検体を一度に処理する装置はどこにも見当たらなかった。

手術室も見せてもらったが、普通の病室と見まがうような部屋の中央に手術台が無造作に置かれ、窓際にガラス戸棚が設置され、今の日本では絶対に使っていないような旧式の医療器具が並べてあり、日本の手術室とは雲泥の差がある（図2）。

図2　外科・ICU病棟の廊下。左端はICU部長、筆者（中央）の右がドブジェ院長

ガラス越しに見た集中治療室の内部は、旧式の人工呼吸器と心電図モニターのみで、日本の集中治療室のイメージとはほど遠く簡素であった。病棟を回る際に羽織ったガウンを着替えることなく、マスクと帽子をつけただけで簡単に入ることができた。術後の女性患者のベッドサイドに連れていかれ、上半身に掛けてあった寝具がいきなりはがされ、痛々しい傷口を見せられた。本人の承諾を得ることも無かったようで、ここでは患者のプライバシーへの配慮は、医療水準同様に不十分であり未だ発展途上にあると感じた。

老人病棟もあったが、みなさん80歳以上とは思えず元気で、身体活動能力も比較的良く保たれ、寝たきりは少なかった。編み物やおしゃべりをしながら楽しそうに過ごしており、ひと昔前の日本の老人ホームに居るようであった。

小児病棟には、病児以外に何らかの理由で育て親のいない乳幼児が少なからず入院していた。職員みんなで育て、里親や養父母が見つかれば退院していき、日本の病院ではめったにお目にかかれぬ光景である。子どもの置かれた状況は悲惨だが、一方で彼らを支える

職員の存在を知り、安堵の気持ちが湧いた。小児病棟の建設資金は、職員の給料からも寄付が集められている。「彼女（看護師）の給料は180ドルと決して高くはないが、各職員の創意工夫により小児科はここまで発展した。彼女のようなスタッフがいる限り、ウクライナの医療は大丈夫だろう」と語られた院長の話が今でも脳裏に残っている。

訪問の最後に歓迎の宴が開かれ、日本人にもなじみ深いウオッカが準備されていた（図３）。円卓を囲んだ参加者からの挨拶が始まり、まずドブシェ院長が歓迎の意を表され、「ウオッカはウクライナ人の涙であり、一滴もこぼさず飲み干してほしい」と結ばれた。グラスになみなみと注がれたウオッカを乾杯の音頭に合わせて一気に飲み干した。出席者が順番に起立し口上を述べ、そのつど注がれたウオッカを飲み干す乾杯が延々と繰り返された。一気飲みを繰り返すうち、急に酔いが回ってきた。“アルコール中毒で動けなくなると、明朝帰国できなくなる”宴の終了時間が気になり始めたが、“ここで飲むのを止めると相手を失望させ、飲み過ぎて悪酔いすると迷惑をかける”と考え始めると俄然緊張してきた。公式訪問を成功させるには、多少身体を犠牲にせねばならぬこともわかったが、結局一気飲みは止め、血中濃度の上昇をセーブしながら飲むことで何とか切り抜けた。

今回の訪問は、酒を適当にたしなむ平均的日本人の私に、ウクライナ人とのアルコール分解酵素の民族差を強烈に感じさせた貴重な経験であった。私の経験を今後の姉妹病院交流の人選に是非役立ててもらいたい。

図３　歓迎会にて、ドブジェ院長（右奥）の音頭で乾杯。筆者は左手前から２人目。

図４　ウクライナの歴史博物館・民族村にて病院研修医とのスナップ。

（公益社団法人福岡医療団千鳥橋病院）

付記：本稿は、筆者が洛和会ヘルスケアシステム（京都市）在職中の2009年11月に訪れた洛和会の姉妹病院であるキエフ市立クリニカ第10病院訪問記である。洛和会病院医学雑誌22巻、2011年に掲載した記録であるが、今回、ウクライナ戦争勃発があり、ウクライナ理解の一助のためにと再掲させて頂くこととした。

［エッセイ］

フルトヴェングラーと私

田中　昭

私には体内に「コレクター気質」というDNAが、他の人よりも多量に含まれているようだ。子供の頃から切手・昆虫・化石・べったん（めんこ）・模型（プラモデル）・グリコのおまけ・力士ブロマイド・マッチのラベル等々を集めるのが大好きだった。喜寿を過ぎた現在も集め続けているものが二つある。一つは「フルトヴェングラー関連品」であり、もう一つは「手塚治虫作品」である。今回は前者について書いてみたい。

そもそもフルトヴェングラーと私との出会いは、父が持っていたフルトヴェングラーのLPに始まる。父は旧制高校（静岡）の学生寮で先輩・友人からクラシックの手ほどきを受けたそうで、レコードをよく聴いていた。その中にフルトヴェングラーの録音があったというわけだ。当時はまだ国産のLPは無く、父のLPは米国プレスの輸入品だった。高価で月給の１／３位したらしい。従って私にLPを聴く許可が出たのは中学生の後半になってからだった。聴き始めてすぐにフルトヴェングラーによる演奏が、他の指揮者のそれとは異なる事に気が付いた。一言で言うと彼の演奏は霊感に満ちていた。静から動へ、逆に動から静への移行が実にスムースであった。テンポや強弱の設定も感動的だった。要するに彼は「楽譜から楽曲を再創造する能力に長けていて、その結果（他の指揮者と比較して）聴衆を感動させる能力が非常に高かった」のである。

ではまず指揮者の役割ついて考えてみたい。

１．指揮者とは？

よく人は言う。同じ楽譜に基づいて演奏するのになぜ異なって聴こえるのか。同じベートーヴェンの「運命交響曲」（因みに運命という呼び名は、日・中・台・韓などでのみ使われており、欧米ではベートーヴェン交響曲第５番とのみ呼称）の演奏でも、フルトヴェングラーとトスカニーニでは非常に異なって聴こえる。同じ楽譜、同人数のオーケストラによる演奏なのにである。理由は言うまでもなく指揮者による解釈の差のせいである。指揮者は楽譜を読んで作曲家の意図を読み取り、自分の解釈を施してより素晴らしい曲として再現する役割を担っている。即ちオーケストラに曲を正確に演奏させ、自分の解釈を加え、出来れば聴衆を感動させるというのが指揮者の仕事である。楽譜と演奏の間に指揮者が介入することにより、指揮者による「再創造」が入るわけである。

続いてフルトヴェングラーの経歴を見てみよう。

２．フルトヴェングラーの生涯

読者の皆様はフルトヴェングラーという指揮者をどの程度ご存知だろうか？ 最も分かりやすく言うと、カラヤンの前のベルリンフィルの指揮者だったドイツ人である。かなり有名な人ではあるが、念のため履歴を記してみる。

1886（明治19）年生まれである。父親は有名な考古学者で、古代ギリシャ美術の権威者であった。ミロのヴィーナスの失われた両腕の分析論文は、特に名高い。母のアーデルハイトは画家であった。彼女はピアノにも長けており、幼い息子にピアノの手ほどきをした。

息子のヴィルヘルムは、幼少期から音楽への才能を発揮し、７歳の時には最初の曲「動物の小曲」を作曲している。学校には通わず（当時のドイツの上流階級では普通のことだった）父親の高弟たちが家庭教師となって、教育を施した。21歳の時父親がギリシャで発掘中に急逝し、長男ヴィルヘルムの肩に一家の家計がのしかかることになる。それまでは作曲家を目指していたのだが、収入を得るために指揮者へと方向転換したのである。その後ミュンヘン・チューリッヒ・リューベック・マンハイム・フランクフルトなどのオーケストラ・歌劇場で修業を積む。1922年に27年間に亘ってベルリンフィルに君臨していた指揮者・ニキッシュが亡くなる。フルトヴェングラーは先輩のブルーノ・ワルターとの激烈な競争に勝って、36歳の若さでベルリンフィルの常任指揮者に就任する。しかし1933年にヒトラーがドイツのトップに就任し環境は一変する。当初フルトヴェングラーはナチスのことを「泡沫政党ですぐに消え去る」と考えていた。だがヒトラーは就任間もなく総統に就任し、独裁者となる。悪いことにヒトラー・ゲッベルス・ゲーリング達ナチスの幹部はそろってフルトヴェングラーの大ファンだった。彼らは事有るごとにフルトヴェングラーを利用する。ヒトラーの誕生記念演奏会やナチ党大会などで演奏を強要される。初めは従っていたが、そのうちにベルリンフィルのユダヤ人楽員の排除が始まり遂にフルトヴェングラーは反ナチスを鮮明にする。具体的には亡命の手助けや、ナチ占領地での演奏拒否などである。勿論ナチ党への入党もしていない。（若きライバルのカラヤンは、併合前のオーストリア・ナチ党に入り、併合後はドイツでもう一度の計２度入党している）。しかしヒトラーやゲッベルスは遥かに上手で、ヒトラーとのツーショットがハーケンクロイツの旗の下での指揮写真などが海外メディアに発信される。これらの宣伝で、ドイツ以外の国々に住む人達には「フルトヴェングラーはナチの御用指揮者」というイメージが植え付けられる。1945年５月のヒトラー・ゲッベルスの自殺によって欧州での第２次世界大戦はやっと終わる。フルトヴェングラーはこの年の２月にゲシュタポの監視の目を逃れてスイスへの亡命に成功していた。フルトヴェングラーにしてみれば、ナチ支配の間ずっと反ナチスを貫いて来たのだから戦後直ちに楽壇で活動できるものと信じ込んでいた。ところが戦勝国（米英仏ソ）はフルトヴェングラーを親ナチ分子として演奏禁止処分に処した。結局1947年５月に連合国裁判所から無罪の判決が出るまで、丁度２年間演奏禁止処分は続いた。それから1954年（昭和29年）に68歳で亡くなるまで７年しか戦後の活動期間は残されていなかった。

と、ここまで書き進めてきて改めて「文章で音楽を説明する難しさ」を痛感している。そこで次の章では、私の推奨するフルトヴェングラーの録音をリストアップしてみる。音楽は聴いて頂くのが一番である。

「百読は一聴に如かず」というわけである。

３．フルトヴェングラーの名盤リスト

（BPOはベルリンフィル、VPOはウィーンフィルの略）

①ベートーヴェン交響曲

第３番「英雄」：1944・12・19 VPO 放送録音

第５番：1947・5・27 BPO 実況

1954・2・28～3・1 VPO スタジオ

第６番「田園」：1952・11・24＆25 VPO スタジオ

第９番「合唱付」：1951・7・29 バイロイト祝祭オケ 実況

②ブラームス交響曲
第１番：1952・2・10 BPO 実況
第４番：1948・10・24 BPO 実況
③ブルックナー交響曲
第７番：1949・10・18 BPO 実況
第８番：1944・10・17 VPO 放送録音
第９番：1944・10・7 BPO 放送録音
④シューベルト交響曲
第９番：1942・5・31 BPO 実況
⑤シューマン交響曲
第４番：1953・5・14 BPO スタジオ
⑥チャイコフスキー交響曲
第６番「悲愴」：1951・4・19/22 BPO 実況

読者の皆様で、上記リスト中の曲目を別の指揮者でご存知の方がいらっしゃれば、是非比較試聴をお願いしたい。別の曲かと思われる程の感動を保証する。

４．最後に

私のフルトヴェングラー・コレクションについて記してみたい。中学・高校・大学の頃には主に資金的理由でコレクションの充実は計れなかった。就職して経済的余裕が出来た上に、仕事上のストレスも加わって収集にのめり込んだ。ことフルトヴェングラーに関する物ならすべて集めた。SP レコード・LP レコード、CD、オープンリールテープ、カセットテープ、８㎜フィルム、VHS テープ、レーザーディスク、DVD などの録音・映像はもちろん、書籍、写真、メダル、記念切手、直筆サイン、直筆書状、胸像、メダル、テレカ、絵葉書、タイピン、カフスボタン、演奏会プログラム、ポスター等である。一時は街中でラングラージーンズとかスプリンクラーとか、フルトヴェングラーに似た文字を見付ける度にドキッとしたものだ。数えたことはないが、多分LP は２～３千枚、CD はそれより多いだろう。我ながら呆れるような数字である。

終わりに現在私が一番心配している事を記す。それは私亡き後のコレクションの行く末である。自分で言うのも何だが、私のフルトヴェングラー・コレクションは日本で十指に入るのではないかと自負している。自分の周囲のコレクター達のコレクションの末路は哀れなケースが多い。残された遺族は、生前の恨み・つらみを晴らすように処分してしまう。家の中で足の踏み場もないほど場所を取る、お金を惜しげもなくを使う、家族サービスをしない等々家族はコレクションに良い思いを持っていないケースが多い。世界的な蝶のコレクションが粗大ごみとして消えたケースもあった。私も諸先輩の没後の実態を沢山見聞きして来たので、自分のコレクションの寄贈先探しを続けている。大学・博物館・図書館などにコンタクトしたが、予算不足・保管スペース不足・学芸員不在などを理由に断られ続けている。自分で収蔵館を建設するしかないかと宝くじを買い続けているが、なかなか当たらない。読者の皆様の中で何か候補先やアイディアがあれば是非下記宛にご教示頂きたい。

〒161-0035 東京都新宿区中井2-15-15
TEL：090-2538-6077
e メール：ttannakka2002@yahoo.co.jp

〈略歴〉
1944年大阪府生まれ。府立北野高校、慶応義塾大学卒業。住友重機械工業㈱に42年間勤務し、主に鉄鋼プラントの輸出業務に従事。退職後青山学院大及び関西学院大で非常勤講師。

［エッセイ］

「世界旅」のスケッチ帖

玄番央恵

私は関西医科大学を定年退職後、夫（大阪薬科大学名誉教授）の企画した旅で訪れたヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドやアジアの国々で、可愛い、気の和む、美しい、愉快な光景に出会って癒され、心を動かされました。そして自宅に帰った後、心に残っている種々の光景を水彩画に描いてきましたが、いつの間にか150枚を超えました。それらの中の12枚を取り上げ、纏わるエピソード等につき記憶の糸を手繰り寄せ、繋ぎ合わせながら以下に綴らせて頂こうと思います。

Ⅰ.『楽しむ』に関連する野外芸能

英国旅行で、多くの政治家や学者を輩出した、あの名門オックスフォード大学の近くまで来た頃、優しいヴァイオリンの音に気付き、頭を上げて見回した。その音は、２本の長い棒の間に張られた一本のゆれ動く綱に左足を置いた一人の中年男性が笑みを浮かべながら奏でるヴァイオリンの音だったのです。驚きました。彼は曲芸師とヴァイオリン奏者の２役を同時に、しかもその近くを行きかう人々をまるで優しく包むように穏やかに演じていたのです。どちらかと言えば、大道芸等は似つかわしくないような都市、このオックスフォード…で（図１）。又、別の機会に英国を訪れた折にロンドンの繁華街の１つ、ピカデリーサーカス周辺、コヴェントガーデンあたりを歩いていた時、様々な年齢の５、６人が、

図１．英国・オックスフォードの綱の上のヴァイオリン弾き

楽しそうな声を発しながらぐるりと取り囲んでいる中央に、キラキラ光る物があるのに興味が沸き、近づいた。それは金色の帽子と軍服を身につけた中年位の男性が中腰でバナナを食べていたが、なんと、男性の腰あたりには椅子が影も形もなかったのです。そう、この“座った振り”が芸能、大道芸なのでしょうね、彼の足元に置かれた金属の容器やその周辺には小銭が散らばっていましたから。彼の近くのふっくらおばさん､「今日も頑張ってるのね」と、ニコニコ顔で彼に声をかけた。又、彼を取り囲む輪の中の青年が、彼を指さし、ジェスチャーを交えながら、隣の女友達に、熱演講義をしているよう…。彼の“座った振り”の大道芸は、横に立つ少年や、近くを通る多くの人々の心を和ませているのでは…と、私には思えた（図２）。

東南アジアの中部に位置し、国民の殆どが仏教徒で、穏やかでゆったりとした雰囲気の感じられるタイへは数回訪れたが、その１回は、その雰囲気を是非味合わせたく思い、娘家族を連れての旅だった。そのタイでは、象は多くの人々に崇められ、大切にされている動物だが、象乗り体験のできる場所がタイにはあり、私たちも、かつて栄華を極めた古都

図２．英国・ロンドンの大道芸人

図３．タイ・チェンマイの象「芸術学校」

の壮大な歴史が眠る遺跡の街・アユタヤで、象の背中に乗って林の中を散策した。ところでタイに生息する象はアジアゾウで、頭が大きく大脳が発達しているためか、アフリカゾウより賢いとか。タイの象が相当賢いことは、タイの北部にある、タイで２番目に大きい都市・チェンマイのエレファント・トレーニング・キャンプで行われたエレファント・ショーでよく分かった。成熟した１匹の象が、あの長い鼻の先に、色の付いたチョークを持ち、それで象の眼前に設置された、画家が油絵を描く際に使うキャンバス様の木枠に張られた白っぽい布の上に、なんと絵画らしきモノを描いていたのです！ 暫くすると象は、鼻を右下方面へ静かに動かし、象の横にいた男性によって鼻先のチョークが別の色のチョークに変えられた。そのキャンバスの向こうには、自身の長い鼻の先に可愛いリボン付き帽子を載せる練習中の象、発声練習中の象、自身の足を右側方や左側方に上げるダンスの練習をする象、膝を曲げてお辞儀する練習を行う象もおり、私たち人間を大いに楽しませてくれた（図３）。

次は、ヨーロッパ。イタリア北東に位置し、海上貿易の中心地として繁栄し、地中海最強の海洋都市で、‘アドリア海の女王’や‘水の都’などの別名でも呼ばれてきたヴェネツイアで、東地中海方面を巡るクルーズ船に乗り込んだ。その船はしばらく航行し、バルカン半島に位置してアドリア海に面するクロアチア南部のドゥブロヴニクに到着した。中世には、ヴェネツイア同様、海洋交易により都市国家として繁栄し、高さ25メートルもの強固な城壁で守られてきたドゥブロヴニク。その街並みを、城壁から眺めると、アドリア海の紺碧を背景に白壁とオレンジ色の屋根が連なっていてとても美しい。正に‘アドリア海の真珠’だと思えた。城壁を離れてドゥブロヴニクの中心部へ行くと、数人の人々が足を留めて、何かを眺めているように見えたので、私もそっと近づいた。人々の前の石畳には、横長の金属棒が２本、少年の腰位の高さで設置されており、その棒には色とりどりの美しく、可愛いインコが３匹、又、若い女性に頭を撫でられ、恥ずかしそうに下を向くホワイトオームもいたのである。さらに驚いたことには、金属棒の近くに立つ少年の肩と頭にも可愛い小鳥が心地よさそうに留まっていたんです。その光景を眺める人々の顔には、かすかな笑みと安らぎが感じられたが、この鳥たち・少年・少女の間で繰り広げられる、自然ショー（？）が私を含む観客に楽しさ、幸せ

図４．クロアチア・ドゥブロヴニクの鳥たちと戯れる少年・少女

図５．スペイン・バルセロナ・サン・ジョセップ市場内レストラン

感を与えているのかも知れない（図４）。

Ⅱ．『食べる』に関連する情景

ヨーロッパ南西部のイベリア半島の大部分を占有するスペイン。その北東部にあるカタルーニャ州の大都市で地中海に面するバルセロナは、スペインの中でも独特の文化的背景を持っている。この街で直ぐ、著名な建築家、アントニオ・ガウディが手がけ、建て始めて100年程経過しているのに未完成の不思議な建造物「サグラダ・ファミリア大聖堂」や、お伽の国を連想させる「グエル公園」を訪れ、楽しい時間を過ごすことが出来た。目的のバルセロナ市民の台所・サン・ジョセップ市場は目抜き通り・ランブロス通りの中程にあった。

市場は、肉屋さんの露店が起源というだけあって、スペイン名物の生ハムと化した豚の脚、皮を剥いだウサギや鶏等があちこちの肉屋さんの店先で見られたが、野菜・果物・魚介類等を扱う店も多かった。さらに朝はカフェに、昼はカジュアルレストランに、夜は居酒屋にと自在に変わるバルが、豚や鶏の脚が一杯吊り下がった肉屋さんの近くにあったので、覗いてみた。炎が高く燃え上がる、大きな目のストーブから得られる温かさと流しのミュージシャンの奏でる優しい音の中、家族、友人、知人らと会話・食事を楽しんでいるようだったが、手前の男女のカップルは、ちょっと‘訳あり’のように見えた（図５）。

数年前の１月、金沢駅で初めて北陸新幹線に乗った。富山駅を過ぎた頃、眼に飛び込んできたのは、雪化粧をし、白、青と藍の色彩ハーモニーの美しい立山連峰！　やがて、終着駅の東京駅。JR 京浜東北線、都営大江戸線を乗り継ぐ等して目的の築地市場駅に到着。80年以上もの長い間、公設の卸売市場として東京の人々に愛されてきた築地市場の役割が豊洲市場に委譲、との新聞報道がここへ私たちを引き寄せた。昼頃の市場内には、人影は殆どなく、地面の木箱には魚たちが行儀よく並んでいた。外に出ると、あの匂い！　近づくと、それは予想通り、湯気の出ている大き目の鍋の中でじっくり煮込まれた厚揚げ、ちくわ、じゃがいも等の発する匂いだった。「あのおばさん、何を注文？」煮えたぎる、おでん種の前で思案中のおばさんと勧める‘おでん屋’のおばさん。店の近くに、バルセロナのサン・ジョセップ市場内のバルに似た、食べる場所があるのでしょうね、客の食べ残し丼

図６．冬の築地場外市場

をいそいそと運ぶおばさんらの元気が、冬の寒風を吹き飛ばしている…ように思えた（図６）。

３年程前の夏、江戸時代の日本に色んなモノ、例えばパン、ボタン、タバコ、テンプラ等の言葉を持ち込み、外国の文化・文明を伝えてくれたポルトガルや、スペインにかねてから興味を抱いていた私たち夫婦は、スペイン・バルセロナで、スペイン・ポルトガルを巡るクルーズ船に乗り込んだ。最初の寄港地は、地中海西部のマヨルカ島のパルマ。この島は‘地中海の宝石’や‘地中海の楽園’等の名前で親しまれるスペインの代表的リゾート地で、多くのヨーロッパ人が頻繁に訪れ、作曲家・フレデリック・ショパン、小説家のアガサ・クリスティ、画家のジョアン・ミロ等の有名文化人も好んで滞在したとか。パルマの高台から、バルセロナにはない、闘牛場が見えた。スペイン領の各寄港地を経て船はポルトガル領に入った。

ポルトガルは、イベリア半島の六分の一の面積のとても小さな国だが、ヴァスコ・ダ・ガマやロレンソ・マルケス等、多くの探検家を輩出し、フェルディナンド・マゼランやクリストファー・コロンブス等のスペイン探検家と共に15世紀の大航海時代に活躍した。

図７．ポルトガル・ポルティマオ市農産物市場

やっとポルトガルの最初の寄港地、ポルテイマオに到着した。農業がポルトガル人得意の主産業と聞いていたので、農産物売買のポルテイマオの市場を訪れた。市場の一角に並ぶ大きなカボチャに気づき、近づいた。このカボチャなら、あのハロウィンに大活躍できるかも…と一瞬思った。あの可愛い女の子が見ているのもカボチャ、それとも？（図７）。

南・北ベトナムの統一を巡って展開した、ソ連と米国間の冷戦の代理戦争とも称される戦争の真最中に誕生した私たちの次男の顔を眺め、私は戦争が終結し、平和に生きられるようにと強く祈念した事を今も時々思い出す。あの悲惨なベトナム戦争で非武装地帯と定められた地域、南北分断の象徴、激しい戦争の跡等が近くに存在するという、ベトナム中部の都市・フエやその近くのダナン、ホイアンを私たちは見たく思い、訪れた。ダナンはベトナムの主要な港湾都市だが、その南方に位置する港町・ホイアンは、16世紀頃、交易の要として機能し、16世紀末以降、ポルトガル人、オランダ人、中国人、日本人が来航し国際貿易港として繁栄。訪れた旧市街で、当時の日本人街と中華街を彷彿させる家屋とそれらの街を結んでいた、日本人の架けた、中央

に祠が設けられた、ユニークな太鼓橋、来遠橋を見、橋を渡った。

19世紀初めに創始されたグエン王朝の都・フエは1945年まで続いた、ベトナム最後の王朝の都として繁栄したそうで、皇城にはフランスの近代的要塞築城法を確立した第一人者・ヴォーバンの建築様式が取り入れられ、皇帝の中にはフランス留学者もいた等フランスとの関わりが強かったせいか、フエだけでなく、ベトナムのあちこちで、あの長くて歯ごたえのあるフランスパンのバゲットをよく見かけた。グエン朝時代の王宮や歴代皇帝の帝陵からなる「フエの建造物群」を見たが、壮麗な王宮、雅で華やかな離宮、それに西洋風の建築物などの混在する個性豊かな建造物群であった。

フエの街を後に、あの大河、メコン川のベトナム最大都市であるミトーへ車で向かった。

日本の輪島等で朝早く開かれる朝市がミトーにもあることを聞き、翌朝、頑張って早起きし、車でメコン川へ出かけた。早朝だというのに、食品は勿論のこと、色んな商品を積んだ小舟がどんどん集まってきた。あの、揺れる船の中で立ってる若い女性、何を勧めてるのかな？ 隣の船から関心があるのか､身を乗り出してるおばさんに…（図８）。

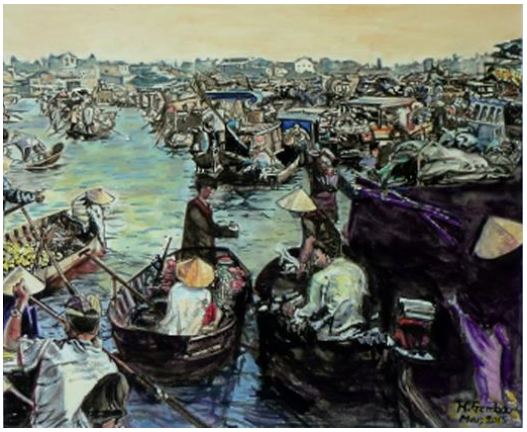


図８．ベトナム・メコン川の朝市

Ⅲ.『住む、出かける』に関連する光景

江戸時代、ポルトガルに次いで日本と関わるようになった西洋の国、オランダはヨーロッパ各国の化学、医学、知識等を、長崎湾の人工島“出島”を通じて日本に紹介してくれたこと、又オランダがあの美しい春の花・チューリップの世界一の生産国である事等を知ってオランダに関心が沸き、次いでに隣国ベルギーをもと思い、オランダ・ベルギー旅行計画を立て娘夫婦や孫たちと共に両国を旅した。まずオランダの風車村へ行き、風車が製粉、製材だけでなく、海面より低い土地のオランダで大雨が降ったりした時等には水がたまらないよう、水をくみ上げ堤防を越えて川に戻すという大事な役割を担っている事を知った。さらに‘北のヴェネチア’と呼ばれ、100㎞以上の運河と多くの橋・島のあるオランダの首都・アムステルダムで遊覧船に乗り、ゆっくり市内を観光した後、鉄道でベルギーの首都・ブリュッセルへ向かった。

先ずブリュッセル郊外にあるミニヨーロッパのモデルパークへ行き、ヨーロッパすべての名所、例えばフランス・パリにあるエッフェル塔、イギリス・ロンドンにあるビッグベン等々の人型人形付き小型模型を見て、すっかり魅了されたのか、孫たちは、いつの間にか、この旅をオランダ・ベルギー旅行と言わずにベルギー・オランダ旅行と言うようになった。次に２年に一回、８月の３日間だけ開催の、数十万のベゴニアの切り花が敷き詰められて創作されるフラワーカーペットを見に大広場、グラン・プラスへ行った。この広場を囲む市庁舎や王の家（市立博物館）等の歴史的建造物には､種々の彫刻が施されており、お伽話に登場のお城を連想させた。予想通り一杯の人出、近くの商店にお土産を探しに行

図９．ベルギー・ブリュッセルのグラン・プラス

った娘や孫たちを待つ間にベルギー名物のワッフルを買い、楽しもうと思っていた矢先、帰ってきた孫たちの口に、そのワッフルは呑み込まれた。その後、人々の視線の彼方にある壮大な花の絨毯、フラワーカーペットを見ようと、前へ少しずつ歩いた（図９）。

初めてのクルーズ船旅行・西地中海巡りのクルーズ船の出航地はイタリア・ジェノバだったので、先ずローマへ行った。古代ローマ帝国時代に作られた円形闘技場・コロッセオを見、凝った彫刻で飾られた宮殿の前にある、青い水を湛えたトレヴィの泉にコインを投げ入れた後、ミラノやトリノを訪れた。その後、やっとジェノバへ行き、目的のクルーズ船に乗った。船の上から街を眺めると、イタリア最大の港湾都市らしく、山上から港まで建物が隙間なく建っていた。ジェノバ港の前の出港地で乗船したのか、プールで泳ぐ人やプールの近くで日向ぼっこする人も多く見られたが、乗客・乗員で満杯の本船は、ドラの音を合図に西地中海クルーズへと出航した（図10）。

図10．イタリー・ジェノバ出航のクルーズ船

イタリアより北方の、ドイツ・バイエルン州の州都・ミュンヘンへ次男夫婦と共に旅をした。この街がドイツを代表する美術館や歌劇場のある‘芸術の都’だと聞いてはいたが、今回は先ずビール、それも白ビールと白ソーセージを…と、ビアホールに飛びこんだ。ステージもある大きなビアホールだったが、11歳以上用メニューにビールが含まれていて、驚いた。この街では、ビールはウーロン茶飲料のような普通飲料なのかな？

ミュンヘンから大都市・フランクフルトに着き、ホテルに荷物を置いて、ドイツで‘最も可愛い街’、‘中世の宝石’と称されるローテンブルクへ鉄道で向かった。駅から少し歩くと、ガイドブックでよく見る小さな広場があり、その周囲には木組みの家や、建物の壁が夫々青、オリーブ色、黄色等で塗られ、しかも可愛い飾り物の突き出ている店が並んでいて、一瞬、童話の世界に入りこんだように感じた（図11）。

又東南アジアを訪れたく思い、ベトナム中南部の、ベトナム屈指のビーチリゾート地・ニャチャンへ向かった。海辺に行くと、透明度が高くてすっきりした青色の海に良く合う白っぽいビーチパラソルが一杯張られ、ゆっ

図11. ドイツの中世の街・ローテンブルク

図12. ミャンマー・ヤンゴン国鉄の中央駅

たりと歩く水着姿の欧米人やロシア人も多く見られた。空で伸びやかに泳ぐ赤や青の勇ましそうな凧にちょっと驚いた。さらにこの街にある、岩と岩の間にあって落ちそうで落ちない不思議な岩‘ホンチョン岬’を見た後、ミャンマーの旧首都・ヤンゴンへ向かった。ヤンゴンの街には食品等、色んな物を売る屋台があちこちで見受けられたが、ミャンマー国鉄の線路敷設部位の線路と線路の間にも屋台があり、驚いた。ヤンゴン駅構内は一体どの様な状態？ と何故か気になって歩く中に、気がつくと駅構内に、そして駅のホームに入っていた。ホームのすぐ近くに停車中の列車の存在が全然気にならないのか、向かい側のホームを目指して犬も人も堂々と線路を渡っているように見えた。又ホームには、沢山のペットボトルを頭に載せて颯爽と歩く若い女性…も（図12)。 （関西医科大学名誉教授）

①英国・オックスフォード
②英国・ロンドン
③タイ・チェンマイ
④クロアチア・ドゥブロヴニク
⑤スペイン・バルセロナ
⑥日本・東京（築地）
⑦ポルトガル・ポルティマオ
⑧ベトナム・ミトー（メコン川）
⑨ベルギー・ブリュッセル
⑩イタリー・ジェノバ
⑪ドイツ・ローテンブルク
⑫ミャンマー・ヤンゴン

訂正：健康塾通信前号（2022年4月15日発行）において玄番央恵「“完全燃焼人生”の田代 裕先生」の51頁８行目「安田祈念医学賞」を「安田記念医学賞」と印刷ミスがありましたので訂正させて頂きます。

［エッセイ］

宝塚少女歌劇　昭和13年～14年「日・獨・伊親善藝術使節」の足跡を辿って

飯島　健

思いがけない偶然で、昭和13年～14年の宝塚少女歌劇「日・獨・伊親善藝術使節」に団員（生徒と呼ばれた）として参加した梅香ふみ子さん（昭和２年初舞台17期生）ゆかりの方とお会いし、手元に、記念出版物「日・獨・伊親善藝術使節」渡欧記念アルバム（図１）（図２）があることをお聞きした。早速、資料を送っていただき、資料と手持ちの資料を合わせて使節の足跡を時系列的に並べてみることとさせて頂いた。

文に登場する主だった人物は、小林一三（阪急電鉄、宝塚少女歌劇の設立者）、小林米三（一三の三男、元阪急電鉄社長）、秦豊吉（演出家）、近衛秀麿（指揮者）夫妻、須藤五郎（音楽家、戦後、共産党参議院議員となる）、大島浩駐ドイツ大使、梅香ふみ子さんなど参加生徒たち、また、何人かの外交官たちである。

図１　日・獨・伊親善藝術使節渡欧記念アルバム

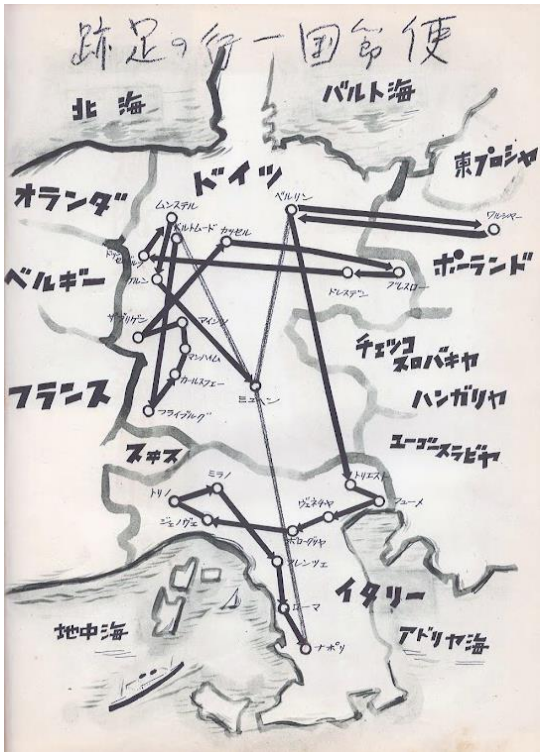


図２　使節団の足跡

日獨防共協定成立下の宝塚少女歌劇団の派遣

この時代、日本は日中戦争が長期化し、満州国をめぐる国際情勢から昭和10年（1935年）「国際連盟」を脱退し、孤立化の道を歩んでいた。その中で計画されたのが宝塚少女歌劇による「日・獨・伊親善藝術使節」であった。

帰国後編まれた資料「日・獨・伊親善藝術使節渡歐アルバム」寶塚少女歌劇団（昭和14年５月10日発行）の冒頭「獨伊藝術使節として渡歐するに際して（９月16日、17日　宝塚大劇場での試演会）」の中で、小林一三校長はいきさつを語っている。

『外務省文化事業部、國際文化振興會と獨逸の宣傳局、伊太利の民衆文化省と交渉の結果、藝術使節として我が寶塚少女歌劇が選擇せられた。九月九日ベルリン駐在東郷大使閣下からの公文によれば、十一月十八日からベルリンのドイツチェ・オペルンハウス劇場(Deutsche Oper Berlin ドイツオペラ劇場)に於て初日を開演し　云々』とあり、「日独伊防共協定」締結１周年を記念して、早い時期から駐独東郷茂徳大使経由でドイツ側の意向を打診していたと想像され、事前準備が進められ、公的には、この九月九日ベルリン駐在東郷大使からの公文（書）が公開されて、試演会に繋がったのであろう。更に小林は『生徒一行は來る十月二日神戸出港の靖國丸で鹿島立（中略）本月（九月）二十八日に秦豊吉東寶専務（中略）が米國經由にて先發、十一月中（ママ　十月中の間違いと思われる）にベルリンに着いて　云々』と計画性の高いコメントをしている。東郷の前任大使は武者小路公共（実篤の兄)、武者小路大使時代からのコンタクトがあったのかもしれない。それにしても慌ただしいスケジュールであったことは間違いない。アルバムには９月19日11時に欧州行きメンバーを発表する小林校長の写真が掲載されている。

実はこの翌年1939年（昭和14年）４月４日に澁澤秀雄（澁澤栄一の子息）東寶会長、吉岡重三郎東寶社長とともに、小夜福子、春日野八千代など生徒による訪米藝術使節團がニューヨークで開かれた万国博覧会出演のため、出発することになっており、この相次ぐ海外公演計画は同時に準備が進行したのではないだろうか。数年後に商工大臣に就任するなど、この頃の小林一三は経済界だけでなく、政界などにも大きな影響力があったと思われるので、バランス外交の一翼を文化面から担っていたのだろうか。

図３　靖國丸にて

順調と思われる獨伊藝術使節の派遣であるが、一行を大きな苦難が待ち受けていた。

それは、外交官から軍人への駐獨大使交代に伴う日獨の外交戦略の変化であろう。

〈少女歌劇団、靖國丸にて出帆〉

日・獨・伊親善藝術使節　渡歐記念アルバム内の「自昭和13年10月２日　至昭和14年３月４日　訪獨伊親善藝術使節　寶塚少女歌劇團日誌　団長小林米三」からの引用を中心に日程を追ってゆく。

10月２日（日）神戸

午前11時　阪急三宮終轉西側２階に集合。小林（一三）校長先生、佐藤（博夫）阪急社長殿、吉岡（重三郎）東寶社長殿、初め關係者及び一行の父兄とお別れのお茶の會。

小林（一三）校長先生の送別の訓話あり。萬歳!!

午後１時　靖國丸に乗船（図３）

午後３時　出帆。賑やかな見送り

10月５日（水）上海

「上陸し、陸軍病院など慰問。翌６日出帆」

10月９日（日）香港

上陸禁止　その日に出帆

10月13日（木）シンガポール

ビクトリア劇場で日本人クラブ慰問餘興

翌14日出帆

以下、ペナン、コロンボ、アデン、ポートサイドを経て

11月２日（32日目）（水）

８時30分ナポリ入港　市内サンタルチアで１泊

〈航海中ベルリンでは何が起きていたのか〉

小林一三は９月16日、17日の試演会での演説で東郷文徳大使（当時）から『十一月十八日からベルリンのドイツチェ・オペルンハウス劇場に於て初日を開演』というお墨付きをもらっていると断言している。その前提で一行は遥かヨーロッパまで一月の船旅をして、まもなくベルリンに到着しようとしていた。

一足早く出発した秦豊吉、須藤五郎、横川信幸は、太平洋航路でアメリカ西海岸、大陸を横断し、ニューヨークでラジオシティ・ミュージック・ホール（1932年（昭和７年）開業）などを視察し、大西洋を横断してブレーメンからベルリンに着いたのは10月28日（金）午後８時、一行ベルリン到着の一週間前のことだった。

秦豊吉の「寶塚歐州公演日記抄」には、想定していなかったことへの秦の驚きと落胆、苦悩が書かれている。

10月29日（土）『秦、大使館神田襄太郎一等書記官と面談。三菱支店からローマ出張員に電話し、ナポリ上陸世話を頼む。須藤五郎は郵船に。神田一等書記官仲介により、31日（月）宣伝省で打ち合わせを決める。大阪朝日、大阪毎日、同盟記者から公演に対する意見聴取。その後再度神田氏訪問し大使館主催の「冬季救済デー」に出演承諾。須藤五郎は30日にナポリにゆき一行を迎えることに。』

10月31日（月）『午後４時時宣伝省劇場局に赴き、説明し「ガールズ・オペラ」ではなく、「レヴュゥ」でもないことの諒解をとった。が、日本で観劇した人に宝塚を「レヴュゥ」と説明しているではないか、と劇場局担当者は難色を示す。

どの劇場でいつ初日を迎えるかは明後日２日（水）に決定することにする、との返事であった。

大使館で大島大使に会う。』ここでの大島の木で鼻を括ったような対応に唖然する様子が日記に書かれている。『いやしくも大使に就任してゲッペルス（国民啓蒙・宣伝大臣）に持ち出す最初の話が宝塚の女のことでは困るんだよ」と葉巻をくわえた不遜な態度で言い放ち、９月９日の東郷前大使の公文（書）を持ち出すと、不機嫌になり解決の糸口が見つからず、辞去せざるを得なかった。

夕方アンハルタア駅で酒匂秀一ポーランド大使を出迎え。

宝塚パンフレットには「ガールズ・オペラ」と翻訳してある。説明が出来ない。』

「ガールズ・オペラ」は下世話な印象があり、ベルリンでは「レヴュゥ」は流行が一段落して下火になりつつあったようだ。着任早々のエリート軍人大使大島浩は、そのプライド故に協力しなかったのだろうか。その一方酒匂ポーランド大使とはワルシャワ公演の実現が決まった。しかし、11月２日（水）生徒たちがナポリに着いてしまう。

その頃ベルリンでは、秦は『午前中劇場局に10日初日は困難、14日頃にしたいと申し入れ。宿舎をオペラ座付近のパンションを物色し、生徒と小林、丸山用としてハルテンベルグ・パラスト・パンジオン（Hardenberg Palast Pension）（図４）（１泊２食＠５マルク40＋60ペンニヒ）男性15人はダアハイム・ホテル・パンジオン（朝食付き＠３マルク）、昼食は日本料理店からの弁当。正午日独協会長アドミ

ラル・フヨルスタアを訪問。大島大使訪問し、意見をもらう。劇場局よりの返事が来ず、懊悩する処少なからず。劇場を借りて手打ち興行いたさんかとも思う。』と苦悩する様子がわかる。

宿舎ハルデンベルグ・パラスト・パンジオンの位置はまだ特定できていないが、ツォー駅から北西にエルンスト・ロイター広場まで伸びるハルデンブルク通りの約１キロの間にあった建物のようである。

エルンスト・ロイター広場から西へビスマルク通りを約１キロ行くとオペラ座広場がある。

11月３日（木）生徒たち一行はローマに午後３時到着し、駐伊大使館でお茶の会に参加し、慌ただしくその日の午後７時ベルリンへ向かう。

一方、秦は『大使館明治節に祝賀に参列。劇場局から昼頃に返事とのこと。ドイツ・オペラ座より「目下寶塚の公演は、ドイツ・オペラ座としては予定しておらず」との回答があり、聞いていた話と違うと、顛末を東京宛電報した』。要はオペラハウスでの演目としては馴染まない、ということであろう。

実は1959年（昭和34年）のカナダ・全米公演のニューヨークでも同じようなことが起きている。旧メトロポリタンオペラハウスで、現地のプロモーターが「ガールズ・オペラ」と銘打って公演したところ、オペラではないと不評を買ったのである。

ベルリンでの公演の目途が立たないという現実に秦は途方に暮れてしまう。

11月４日（金）神田一等書記官を仲介にして交渉し、國民劇場（テアター・デス・フォルクス Theater des Volks）で11月20日初日、冬季救済事業への寄附をする公演を含めて４回公演という代案が浮上した。國民劇場の歴

図４　パンション前にて

図５　現在のフリードリッヒシュタット・パラスト

史は1870年代に遡るサーカス劇場で、現在はフリードリッヒシュタット・パラストと場所も名も変わっている（図５）。偶然だろうか、それとも必然だったのか、2000年（平成12年）の宝塚歌劇ベルリン公演も、このフリードリッヒシュタット・パラストで開催された。

「水晶の夜、タカラヅカ」で岩淵達治が書いているように、３千人を超す客席を有する大

劇場での公演まで２週間で、どのように宣伝展開をするか、秦は新たな悩みを抱えることになる。

そうした中、生徒たちは午後11時にベルリンに到着した。神戸を鹿島立ってから34日目のこと。迎えは秦豊吉などわずか数人であったという。

早速翌日からベルリンでの活動が始まった。

11月５日（土）秦、小林、主な生徒は大使館及び陸海軍に挨拶。國民劇場20日（日）から23日（水）までの４回公演が正式に決まった。秦はそのプロモーションを兼ねて試演会を考え、会場として「ベエトオフェンザール(ママ)」を見聞して決めている。

ベートーヴェン・ザール（Beethovensaal Köthener Straße 32, Kreuzberg）はポツダム広場の南、旧フィルハーモニーの一角にあったコンサートホールで、現在高層住宅になっているらしい。フルトヴェングラー指揮ベルリンフィルの SP レコードの録音会場として有名。客席数は1066席。1944年の爆撃で破壊された。

11月６日（日）『ベエトオフェンザール試演会の準備にかかる。午後ポーランド・イタリア公演の打合をなし、生徒たちお揃ひの着物の制服にて、午後４時全員バスでホテル・カイザアホフでの日獨伊防共協定祝賀の茶話会（図６）に。「大島節」「君は神」を歌ふ。他にナチス少年少女隊の合唱もあり。日本衣裳の女性、忽然として現れたる事なれば、甚だ衆目を牽く。

11月７日（月）午後４時　大使館邸でレセプションに出席。餘興數番をする。

11月８日（火）「小林はローマへ、須藤はワルシャワへ、生徒は邦君（舞踊家・邦正美）の案内でポツダムへ。秦は午後５時劇場局に

図６　カイザアホフでの日獨伊防共協定祝賀茶話会

赴き「國民劇場」との契約をなす。ポスター及び切符夫々配附す。試演会切符一等六マルクは高いとか。日獨親善ならば無料観覧せしむべしとかいう者ある由。女子ホテルに近衛秀麿君の来訪あり。連日疲労困憊す。

11月９日（水）衣裳等舞台道具到着。夜日本人クラブ招待會に。餘興數番をする。

深夜、日付は10日になっていたが、「水晶の夜（クリスタル・ナハト：11月９日夜から10日未明にかけてドイツ各地で発生した反ユダヤ主義暴動）」起きる。

11月10日（木）「アパート近くに稽古場（Künstlerhaus St. Lukas Fasanenstr. 13）を借り入れ、本日午後よりベートーヴェン・ザールでの試演会の稽古開始』

筆者はベルリン在住の宝塚OG祐輝薫さんにシナゴーグなどがあるユダヤ人街を案内してもらったことがある。シナゴーグには銃弾の跡が残るなど往時の悲惨な状況が窺えたが、この稽古場とはかなり離れていた。神戸新聞に連載された天津乙女さんの自伝のなかにも、ベルリン公演の記述はあったが、「水晶の夜」の記述はなかったので、果たして本当に体験したのだろうかが気になっていた。地図などで確認し、稽古場前の道路（Fasanenstr.）を隔てた南側に、ファサネンシュトラーセユダヤ教会（Fasanenstrasse Synagogue）があり、

破壊されたことが確認できた。秦の日記では『午前ベルリン市内ユダヤ人商店打ちこわしの騒ぎあり（中略）向かい側のユダヤ教会放火せられ、終日燃えつつあり』と記されている。ファサネンシュトラーセ教会の火災を目の当たりにしたのだろうか。それとも下火になり無残な残骸となったのを見たのだろうか。

祐輝薫さんによれば、このシナゴーグは現在、ユダヤ教のコミュニティセンターとなり、市民大学も入っているとのことだ。

その日の夕方ローマから戻った小林米三の「訪獨伊親善藝術使節　寶塚少女歌劇團日誌」によれば『夜、三菱商事の晩餐會の餘興に出席。糸井しだれ、若竹操、星影美砂子の獨唱及「雪」「五人道成寺」』とある。この三菱商事の晩餐會に参加した生徒たちは「水晶の夜」を知っていたのだろうか。知っていたとしたら、その心境はどんなものだったろうか。

11月11日（金）午前９時から午後５時まで稽古。何人かの生徒は大毎（大阪毎日新聞ベルリン）支社の座談会に出席し、スキ焼をご馳走になるとの記述があり、更に別の生徒たちはオペレッタを見に行ったとあるので、不穏な状況ではなかったとは想像される。

11月12日（土）この日も終日稽古をし、国立オペラ劇場で「バタフライ」見学とある。

11月13日（日）『（翌日の）ベートーヴェン・ザール公演の（稽古場での）通し稽古　秦豊吉、生徒に激励の辞あり、一同深く感激す』とある。内容は不明だが、水晶の夜のことなど、ユダヤ人について語ったといわれている。

11月14日（月）秦は日記で『正午よりベエトオフェンザールで舞台稽古。舞台稽古を見て、須藤君等と階段に腰を下ろし、嘆息すること屢々なり』とあり、決して満足のいくものではなかったようだ。しかし小林の日誌では『午後８時15分より試演会開演。在伯林邦

図７　ベルリンの街の生徒たち

人野原駒吉氏の解説あり。「三番叟」「紅葉狩」「祇園小唄」など。大島大使以下法人有力者、獨逸政府関係者、批評家、新聞記者、役者、舞踊家等、堂に満つ。大喝采、大成功裡にて午後10時30分終演』と書かれており、秦たちの心配は杞憂に終わったのかもしれない。大堀聡氏はホームページで、野原駒吉は当時のベルリン邦人社会で最高のドイツ語の語り手だったのではなかろうかと書いている。

ともかく、この試演会により20日（日）から23日（水）までの國民劇場公演への弾みがついたことになった。

11月15日（火）試演会を終え、生徒たちは買い物に出た（図７）。梅香ふみ子さんのアル

バムには（KaDeWe：カーデベー、Kaufhaus des Westens 百貨店）をバックにした写真がある（図８）。

夜は国立オペラ劇場で「ローエングリーン」見学とある。

11月16日（水）午後３時～６時國民劇場で稽古

秦氏は公演打合せのため、ワルシャワへ。

11月17日（木）『午後３時～６時國民劇場で稽古　夜ホテル・エスプラナーデ（Hotel Esplanade）での正金銀行晩餐会の余興に出演』

このホテル・エスプラナーデはポツダム広場にあった高級ホテル。筆者はこのホテル名を継いだ Sheraton Berlin Grand Hotel Esplanade に宿泊したことがある。

11月18日（金）この日は９月16日の小林一三の演説によれば『ドイッチェ・オペルンハウス劇場 Deutsche Oper Berlin に於て初日』のはずだった。

『午後３時～７時國民劇場で稽古。秦氏ワルシャワより帰られる』

11月19日（土）『須藤、長谷川　オーケストラ稽古。午後３時～８時國民劇場で稽古』

11月20日（日）『正午より午後５時まで舞台稽古。初日①午後８時15分開演10時45分終演　満員、大成功。出し物左の如し』と、群舞宝塚音頭からのプログラムが並ぶ。野原（駒吉）氏の解説あり（図９）。

11月21日（月）『生徒、外套一着宛新調。夕方、先生、生徒スキヤキ會。第２夜　満員』

11月22日（火）『午前大阪毎日新聞本社よりベルリン支社へ国際電話　雲野かよ子、汐見洋子、糸井しだれが小夜福子、三浦時子などと通話。小林、天津乙女、奈良美也子、雲野かよ子、近衛秀麿子爵の宿に中食招待される』とあるので、近衛の同棲相手であった澤

図８　カーデベー百貨店前にて

図９　國民劇場での娘道成寺

蘭子とも会ったと思われる。副組長の奈良美也子は同期生、ここで上級生である天津乙女やその妹雲野かよ子と旧交を温めたのであろうか。

ここで、澤蘭子、近衛秀麿とのことを記しておきたい。

澤蘭子（明治36年（1903年）～平成15年（2003年））仙台市に生まれ、大正８年（1919年）寶塚音樂歌劇學校入学、芸名は泉蘭子。翌大正９年（1920年）初舞台、宝塚歌劇団９期生。同期に奈良美也子などがいる。大正10年（1921年）結婚のため退団。その後、初期の映画女優となり、「籠の鳥」が大ヒットするなど人気スターとなる。昭和12年（1937年）アメリカ行きの大洋丸で近衛秀麿と出会い、恋愛関係になる。近衛に同行して、ベルリンに渡り、一行がベルリン滞在時には近衛とともに

図10　秦豊吉と生徒たち

図11　ベルリン関連地図

ベルリンに居住していた。昭和15年（1940年）２月には長女曄子（あきこ）を生んでいる（ウィキペディアから引用）。

第３夜　満員

11月23日（水）『ベルリン公演千秋楽「小林交渉のため再度ローマへ　午後３時日獨協会婦人部お茶の会　第４夜　連日４千人劇場大入満員。冬季救済事業に当夜の全収入寄附。ベルリンに「タカラズカ（ママ）」の名、風靡す』

11月24日（木）ポーランド公演のため国歌外稽古。

11月25日（金）『夕方小林ローマより帰る。アパートに於いて、賑やかな「サヨナラ・ディナー」。全員ベルリンの最後の夜を散策す』

秦豊吉にとっては10月28日から、生徒たちにとっては11月４日からの怒涛の日々は終わった（図10）。

11月26日（土）午前９時49分ワルシャワへ向かって出発した。ヨーロッパを出発して帰国の途に就くのは明けて１月29日のことであり、これからポーランド、イタリア、ドイツでの公演が続く。

（元宝塚歌劇団プロデューサー）

（注）

・ベルリンドイッチェ・オペルンハウス
Deutsche Oper Berlin Bismarckstraße 34–37

・國民劇場
（テアター・デス・フォルクス Theater des Volks）
現在のフリードリヒシュタット パラスト
Friedrichstadt-Palast Friedrichstraße 107, 10117 Berlin

・ベートーヴェン・ザール
Beethovensaal Köthener Straße 32, Kreuzberg, Berlin

参考文献

「日本・欧米間、戦時下の旅―第二次世界大戦下、日本往来の記録」泉孝英　淡交社
「外務官僚たちの太平洋戦争」佐藤元英　NHK ブックス
「行動する異端　秦豊吉と丸木砂土」森彰英　TBS ブリタニカ
「ビギン・ザ・ビギン―日本ショウビジネス楽屋口―」和田誠　文藝春秋
「小林一三の昭和演劇史」大原由紀夫　演劇出版社
「小林米三氏の追憶」森薫編　京阪神急行電鉄株式会社
「日・獨・伊親善藝術使節渡歐アルバム」寶塚少女歌劇団（昭和14年５月10日）
「二列目の隠れた異才たち」池内紀　晶文社
「水晶の夜、タカラヅカ」岩淵達治　青土社
「岩淵達治戯曲集　雪のベルリン　タカラヅカ」岩淵達治　カモミール社
「愛に破れて」澤　蘭子　月刊読売1950年（昭和25年）７月号
大堀　聡氏のホームページ「日瑞関係のページ」
「梅香ふみ子さんの渡欧記念写真アルバム」

［エッセイ］

学会雑記
―記憶に残る人―

渡辺貞一

はじめに

円の為替レートは、戦後の１ドル360円の固定相場制から、71年以降、変動相場制に変わり、国力や海外情勢とともに大きく上下に変動し、今は120円前後である。

海外に行くと、この為替レートは気になる存在であった。カードがまだない時代は、通貨の持ち出し制限もあり、両替のたびに気を遣うことであった。

特にヨーロッパでは、ユーロ通貨に統一されるまで、各国は、ポンドやマルク、フラン、リラ、ギルダーなど固有の通貨であり、国を跨ぐと入国ごとに両替が必要であった。

また、国によっては、使い残しの通貨の両替ができない場合があり、気を遣う存在であった。

紙幣の大きさは、国や額によってまちまちで、特にイタリアのリラは大きな紙幣で、両替をして驚いた記憶がある。

硬貨も各国いろいろで、イギリスでは伝統的な12進法の多様な硬貨が使われていた。硬貨は余りやすく、すぐにポケットが一杯になった。

チップや寄付に使ったが、今も古い硬貨が少し残っている。

後年、貨幣の持ち出し制限がなくなり、各国でカードや SNS が使えるようになって両替が不要になり、また現金もほぼ不要となって、海外に出かけることもずいぶん楽になった。

50年ほど前までは、海外に出かけることは夢であったが、垣根は低くなり、地球は狭くなった。

国際学会

Ｔ社の研究所にいたとき、初めて海外出張をした。1968年の夏のことで、オランダで開かれる IEEE のパターン認識の国際学会（ワークショップ）に参加し発表する目的であった。

まだ成田空港はなく、羽田から南回りのプロペラ機（SAS）で出発した。プロペラ機なので、給油と整備のためマニラ、バンコック、カラチ、ベイルートなど各地に途中寄航し、また数時間後に飛び立つという、のんびりした空の旅であった。

ヨーロッパまで33時間かかった。機内食は、途中からの乗客にも合わせて出るようで、頻繁に飲み物や食事が出た。

長い旅なので、知り合いもできた。隣の席は、中山悌一さんであった。

オペラ二期会の創設者の一人で、東京芸大の教授である著名なバリトンのオペラ歌手であった。

夏休みに、ローマにオペラを聞きに行くということで、ローマまで同行した。こちらから、研究の紹介や郵便番号の学会発表の話をし、先生からオペラの話を聞いた。

印象に残る話として、毎年夏に、ローマに勉強に出かけている。トップレベルの歌手の歌を聴き、話をすることが一番勉強になる。できるだけ最高レベルのものを聴き、吸収することが上達に大切なことであると話されていた。いろいろなことに通じる大切な話として、よく通る声とともに強く印象に残っている。

パターン認識の国際学会は、オランダのデルフトで開催された。

デルフトは、アムステルダムから電車で１時間ほどのところにある人口10万人程度の小さな街で、有名なデルフト工科大学がある学園都市であった。街は、運河が走りハネ橋があり、水と緑が豊かで、若者が自転車で走る学生の街であった。

ワークショップは、この街のホテルで、３日間、缶詰で行われた。

発表は、手書き郵便番号の読み取りの研究と実用装置の開発で、準備に気を遣った。国際学会は初めてなので、短い技術映画と自己流の説明用のカセットテープを用意して、認識の方法論やビジョン、哲学を中心に紹介した。

発表は、文字パターンの小さな部分的な特徴を大きな特徴にまとめ上げ、その特徴列を、パターンの変形や曖昧さを吸収するオートマトン型の決定グラフで認識する方法を紹介した。研究のコンセプトとしては、認識は情報圧縮のプロセスであるという考え、すなわち、文字パターンを32×32の白黒（1、0）のパターンに変換すると、２の32×32（1024）乗の巨大な情報量になるが、それを段階的に圧縮変換し、最終的には、４ビット、すなわち、０から９までの10通りの情報量に圧縮することに等しいとして説明した。それを、手書き郵便番号の読み取り装置の開発と合わせて紹介した。

持ち時間は20分であったが、チェアマンの配慮で、40分になった。ワークショップは、大きな大会と違い、自由度が大きく開放的で、その良さが印象的であった。

この学会は、全員招待で同じホテルに宿泊する形式であったので、多くの知り合いができた。

印象に残る人として、発表後に声をかけられたイギリスの電気工学者で物理学者のガボール（Gabor Denes）先生がある。当初は分からなかったが、イギリスのインペリアル・カレッジの教授で、ホログラフィーの発明者であった。発表を評価していただき、いろいろ質問を受け、コンセプトを議論した。先生は、パターン認識に興味があり、この学会では、ホログラムを使って、活字文字を認識する研究を発表されていた。

パターン認識は、生まれたての若い学問で、いろいろな考えや研究方法があるものだと思った。数年後、ガボール先生は、ノーベル賞（物理学）を受賞され驚いた。

ホログラフィーは、身近なところでは、クレジットカードや紙幣（５千円と１万円札）の偽造防止に使われている。また、３次元記録や画像処理のガボールフィルター、さらには次元を下げるという概念は、先端の物理学（重力理論）にも顔を出している。

いま一人、この学会で、渡辺　慧先生と知り合いになった。量子物理の専門家で、後にパターン認識で優れた業績を残された米国の大学の先生であった。ホテルにチェックインのとき、イニシアルが同じの同性の方がいて、すでにチェックイン済みと言われて、戸惑った記憶がある。

先生から、研究が面白いので、内容がわかる論文のプリントを要請された。ちょうど、IEEE の Proceeding に採用されたばかりの論文の写があったので、それを渡し説明をした。若い分野の学問は、ビジョンや方法論、哲学を議論するのが有益で楽しいと思う。いろいろな刺激や触発があり、研究の醍醐味に触れることができる。

その後、先生は、「部分空間法」や「醜いアヒルの子の定理」（各特徴を同等に扱うと、パ

ターンの区別がつかないという特徴抽出の定理）などの立派な仕事をされた。

我々は、そのころ飯島泰蔵先生（東工大教授）と共同研究を行い、理論と実験を繰り返し、２年間の紆余曲折を経て、「複合類似度法」を開発したが、これは渡辺先生の部分空間法と形式は違うがほぼ同じもので、時期も同じであった。今では、それぞれ独立に考案、発明されたとものと認められている。

先生とは、手紙やメールのやりとりをしたが、その後お会いする機会はなかった。

学会発表とは別に、ヨーロッパ出張には、企業としてのもう一つの重要な仕事があった。それは、各国の郵政省を周り、郵便番号読み取り装置を紹介することであった。

郵便番号制度は、この年の７月に世界各国で始まっていたので、関心は高く、政府関係者を対象に講演をして歩いた。三井物産の現地駐在の人にエスコートしてもらい、オランダ、イギリス、イタリアとスウェーデン、ノールウェー、フィンランド、デンマークの北欧諸国を回った。

講演を初めてすぐに気がついたことであるが、日本は極東の遠い国で、ほとんど知識がない人が多く、地図を用いて位置や島国の説明からはじめる必要があった。説明は、都会の様子や郵便局などの写真紹介を交え、日本の郵便制度や郵便番号読み取り装置の説明をした。毎回、質問が多く予定の時間を超えることが多かった。学会用に用意した映画と英語のカセットテープは、大変役に立った。

講演を終えると隣の国へ移動するきつい行程であったが、しばらくすると慣れて楽しくなった。

講演の合間の休日に、観光に出かけた。北欧にいたとき、西堀榮三郎さんにお会いした。西堀先生は、元京都大学理学部化学科の教授で、戦時中は、東芝の研究所におられて、高性能で大量生産が可能な“真空管ソラ”を開発されたことでよく知られていたが、当時は何よりも、南極第一次越冬隊長をされたことで著名な人であった。

人柄は気さくで、一緒に観光に出かけたり、食事をしたりした。越冬の話も少しお聞きしたが、印象に残る話は、大学での実験器具のピペット作りの競技大会の話であった。

ガラス管をガスバーナで細く引き伸ばし、先端をごく細くした液体の計量器具であるが、その準備のためガラス管をポケットに入れて、いつも手先で回転させ手に馴染ませていて、コンテストで良好な成績（優勝）を納めたという話であった。

なんとなくわかる話で、不思議と印象に残っている。

先生は、南極、ヒマラヤ、研究の未知の分野に挑む、根っからの探検家である。翌日、ノールウェー政府から招待され、南太平洋冒険のコンティキ号の会に参加されていた。

著書「南極越冬記」（西堀栄三郎、岩波新書、2009年）を読むと、未知の課題を、厳しい環境下で限られた資源を使って、工夫をしながら乗り越える探検心が感じられ、またそれを楽しんでいるように見えた。

私の義兄も南極に行っているので、南極観測隊の話は身近に感じられた。

後年、先生の自宅を訪問する機会があったが、山小屋風の簡素な家であった。

学会や研究会で、発表が評価され親しくなると、自宅に招待されることがある。画像処理（がん細胞の画像認識）の仕事をしていたとき、ライデン大学の先生に招待された。先生は病理学者で、顕微鏡とアンモナイトのコレクションをされていた。オランダは顕微鏡

の発祥の地で、年代物の顕微鏡十数台が、窓際に並んで展示されていた。

アンモナイトの化石も見せてもらった。アンモナイトは数億年前に栄えた頭足類の殻で、きれいな渦巻きがある大きな化石であった。

夜は、先生の研究室の学生たちが、バンド演奏をして歓迎してくれた。

いろいろ話をしていて、研究費の話になった。先生は、研究費の一部は、貴族が長年支援してくれているとの話で、開けたオランダでも“Noblesse oblige”が、今も制度として存在しているのに驚き、認識を新たにした。

ヨーロッパでは、貴族制度は、各国で、今も続いているという。

学会活動

学会活動のもう一つの側面として組織活動を支える運営や委員活動がある。この活動に、徐々に参加するようになった。国内は、主に電子情報通信学会（IEICE）で、海外は、IEEEである。

電子情報通信学会は、研究所に所属して、すぐに入会した。当初は、大会や研究会で発表するためであったが、その内、小さな委員会の委員や論文の査読、委員会の運営を頼まれるようになった。

電子情報通信学会は、会員が約４万人の大きな組織で、この中の情報分野の仕事を担当した。

学会の事務局は、東京タワーの前にある機械振興会館にあり、アフターファイブの夕方から、ここの会議室に集まって、論文の審査や委員会、編集会議などの仕事をした。

編集の責任者になったころ、論文投稿が多くなり、特に情報処理分野を中心に急増し、論文誌が非常に厚くなってきた。これは、論文発行の遅延や財政的な問題を引き起こすので、見直しが必要であった。そして専門分野を整理見直しするとともに、論文誌を分冊化して薄くすることにした。

学会は、大学や研究機関、企業などの専門家の集まりであり、また専門分野の独立性が強いので、反対意見もあり、しばしば意見は交錯し、議論は長引いた。

機械振興会館は、夜９時になると閉まるので、その後は、渋谷や新宿に出かけて、遅くまで話し合いを続けた。しばらくすると不思議なことに、反対や対立は解消され、皆が満足できる案にまとまることが多かった。帰宅は、午前０時を回ることが多く、体力的にはきつかったが、あまり苦にならなかったように思う。

その後、論文誌は、４分冊から７分冊になり、会員に対するサービスを維持しながら財政負担も軽減された。

この時のメンバーとは、今も交流が続いている。

IEEE（Institute of Electrical and Electronics Engineers）は、米国に本部を置く、電気・情報工学分野の世界最大の学術研究団体で、会員数は現在42万人といわれている。

Society（専門分野）はいろいろあるが、ソフトウェア部門の Advisory member に参加した。会議は、毎年１回、２日間、米国を中心に各国持ち回りで開催された。メンバーは、20人ほどで女性が半数を占めていた。議題は、ソフトウェアの会誌や専門誌のテーマや特集の議論で、３年ほど先の傾向を予測し、取り上げるべきテーマを議論することであった。メンバーの見方や意見は勉強になり、その後の仕事にも役に立った。

メンバーは全員意見を求められるので、準備に時間をかけたが、少人数に別れて具体的な議論を始めると、スピードが早くなり話題

についていけなくなることが多かった。責任を果たすため、大切な言いたいことは、最初にまとめて発言した。しかし語学力の不足を、毎回、残念ながら反省させられた。やはり幼い頃からの、会話の訓練と習得は大切で、国際的な水準を超える必要があると思った。

会議は、一年おきに米国と他国で開催されたが、どの委員も招致に熱心で、自国の良さを PR していた。

東京でも、F 社の委員と協力して汗をかきながら開催した。

女性委員は、政府機関や大学の教員、企業の経営者が中心で、専門性が高く非常に優秀な気がした。そして多くの女性は、夫を同伴されていた。会議に合わせて、夏のバケーションのようであった。

大きな学会や組織に属さない、小さな若手の研究者・技術者の活動グループもあった。その一つが、AVIRG（視聴覚情報研究会）で、画像や音声を中心にパターン認識や情報処理の研究発表を行なっていた。会員は150名ほどで、会費は取らず企業からの寄付で自主運営されていた。会則は緩く、運営の自由度は大きかった。

初期のころ、この研究会の幹事を 2 年ほど担当した。その時の委員長は、高橋秀俊先生（東大理学部物理学科教授）で、いろいろ学ぶことがあった。

先生は物性が専門であったが、パラメトロン計算機の発明者でもあった。電子回路の端子やコネクターなどの実装問題から、量子物理学の基本法則まで、幅広く深い知識の持ち主であった。

先生は、多くの専門書（教科書）を出版されているが、基本から応用まで、配慮の行き届いた良質な著書であり、どこかファイマン物理学の教科書に通じるものがあるように思った、

先生は、研究会で発表が始まると、よく居眠りをされた。気になったが、発表が終わると、内容をよく理解した的確な質問やコメントがあり、ほっとすることが多かった。

先生とは、運営の打ち合わせや雑談をしたが、示唆に富む話が多く、発想の豊かな知の巨人と思った。

AVIRG 研究会は、数年前に解散となった。ここから、多くの優れた研究者や技術者が育っていったように思う。

まとめ

学会活動を通して、多くの知り合いや友人ができた。その中の記憶に残る人々を少し紹介したが、すでに故人になられた方も多い。他にも紹介したい立派な方が多いが、プライバシーの問題もあるので、時期を見て記録に残したいと思う。

パターン認識の仕事をして、人間（生物）の情報処理は、曖昧であると思う。情報そのものが曖昧であり、その処理も表現も曖昧である。明示的なアルゴリズムは存在しないようで、曖昧な情報を、時々刻々大量に処理し、少しずつ認識を深め、コミュニケーションを図っているように見える。

パターンは、人間にとって基本的な情報単位の一つであるが、意味があるもの、ないものがあり、パターンの認識とその意味論は大きなフロンティアであると思う。

若い柔軟な発想で、曖昧な情報処理の基本に迫り、解明されることに期待したいと思う。

（NPO 法人広域連携医療福祉システム支援機構　副理事長）

［エッセイ］

「叔父子」の祟り

大田高祐

前回の健康塾通信で語った如く、崇徳天皇は、白河法皇と待賢門院璋子（たまこ）との間に生まれた不義の子であり、そして宿命の子であった。形式上の父・鳥羽天皇は、この子を「叔父子」と呼んだ。形の上では子であるが、実は叔父に当たるという意味である。それならば、崇徳天皇から見れば、鳥羽天皇は「甥父」ということになろう。この関係を理解しやすくするために、系図を示すべきであろうが、そうするとかえって分かりにくくなるという不可思議な関係なのである。

崇徳天皇は実父・白河法皇に熱愛され、その前途は洋々たるものと思われた。しかし、このような不義の子の幸運が保たれるのは、独裁者の保護下にあってこそであろう。独裁君主・白河法皇の死後、崇徳天皇の運命が、次第に雲行きが怪しくなってくるのは、当然のことであったのである。

崇徳天皇は詐欺的に皇位を降ろされてしまい、上皇となったが、院政などは思いもよらぬ権力なき上皇であった。鳥羽法皇は、崇徳上皇を疎んずるようになり、自身の臨終の際も崇徳上皇との面会を拒否したのであった。その後、崇徳上皇は我が子を皇位に即けようと、権力の回復を狙い、組むべきでない相手と手を組んでしまい、保元の乱で大敗し、破滅に陥った。そして出家の上、讃岐へと流されてしまったのである。

讃岐に流された崇徳上皇は、何年待てども許されることなく、京へ帰れなかった。その間、皇位に即けたかった長男にも先立たれ、帰洛も絶望的となり、失意のまま讃岐で亡くなったのである。そして、その遺体も京都に戻ることなく、讃岐に葬られたのであった。

崇徳上皇は讃岐で心静かに暮らしたのであろうか。ある記録は、讃岐での恐ろしい話を伝えている。朝廷に冷たくあしらわれ、二度と京の都には戻れないと絶望した上皇は、自らの舌を噛み切り、国王を臣下となし、臣下を国王となさん、との文章を、滴る血で記し、朝廷を呪詛したのであった。上皇は髪も爪も切らず、その姿はすさまじいものとなった。崇徳上皇の死についても、色々と不気味で恐ろしい話が伝えられている。その後、都人たちは、この崇徳天皇の怨霊を恐れるようになる。

崇徳天皇は生前の復権は果たせなかったが、その死後に怨霊として見事に復活を遂げ、大魔王として強大な力を得たのであった。白河法皇と璋子という二人の怪物の間の子・崇徳天皇も、死後にやはり真の「怪物」となったのである。

崇徳天皇の呪詛はその後に現実となり、国王たる天皇は臣下たる将軍に圧倒されていくのである。長く武家に屈従し続けた朝廷が、幕末維新期に至って再興した時に、讃岐から崇徳天皇の霊を京都に迎えようとしたのは、崇徳天皇の呪いを解くためであったのであろう。その時、京都に迎えられた崇徳天皇の霊を祀ったのが、今出川油小路の白峯神宮である。いかに朝廷が崇徳天皇の怨霊を恐れたかが、よく分かるのである。

こうして京都に戻ることができた崇徳天皇であるが、実はそれ以前にも色々な形で京都に侵入していたのである。それらのいくつかを訪ねてみたい。

聖護院の塔頭の積禅院には、人喰い地蔵と

いうものがある。この恐ろし気な名前の石仏は、崇徳天皇の鎮魂のために作られ、現在の京大病院の辺りにあったものを移したもので、元は崇徳院地蔵と呼ばれていたものが、次第になまって、人喰い地蔵となったものである。「すとくいん」を早口に連呼して、「ひとくい」に訛りやすいかを試してみても、必ずしもそうではない気もするが、怨霊たる「崇徳院」が「人喰い」に化けるというのも意味ありげである。この石仏を日中拝しても特に変わったところもないのであるが、薄暗い夕方に一人でその前に佇んでいると崇徳天皇の霊威の如きものが立ち現れてくるように見えるのは不思議である。霊的なものは、やはり暗くなってくると現れるものなのであろうか。

縁切りで有名な安井金比羅宮にも崇徳天皇が祀られているが、それは近くにある崇徳天皇廟から移されたものである。その崇徳天皇廟は現在も残っており、中には小さな塚が存在している。その塚には、「崇徳天皇御廟所」の石碑が立っている。私が訪れた時はかなり暗くなっていたので、なかなかその塚が見えにくく、垣根の外からあちこち視点を変えては覗き込んでいたので、近くを通行する人々から、不審の目で見られ続けたのであった。史跡見学には時として人から怪しまれることに耐える強い心や、疑惑の視線に気が付かない鈍感さが必要なのである。人喰い地蔵では霊威を感じ取るために薄暗い環境を選んだが、史跡の観察が目的の場合は、やはり明るい日中が相応しい。この時は、薄暗さに苦労しつつも、何とか塚を視認することができたのであった。

大原の西の江文山の山上には、琴平新宮社という神社があるが、そこにも崇徳天皇が祀られている。それは、崇徳天皇の側室が天皇の霊魂をこの山に祀ったことに由来している。この神社に私も参拝を試みたことがあるが、獰猛そうな猟犬を連れた狩猟者たちが山に入っていくのを見て、身の危険を感じたため断念してしまった。勇気が足りなかった自分が恥ずかしい。

以上の史跡は取り上げられることも多く、ご存知の方も多いであろうが、次に紹介する崇徳塚を訪れたことがある方はかなり少ないと思う。この崇徳塚が、京大医学部構内にあると聞いた私は、京大医学部や大学病院の事務に問い合わせてみたのであるが、全く聞いたことがないとの返事であった。自分で探すしかないと、用事がある度に医学部構内を歩きまわり、何度目かにようやく辿り着いた。そこは大学構内らしからぬ一種不気味な空気に包まれていた。一本の巨樹の根元に数体の石仏が祀られ、少々気味の悪さを覚える所であった。近くで学生の声が聞こえるはずの環境であるが、なぜかそこは異様な静寂さが漂う所なのであった。この崇徳塚には崇徳天皇の遺品が納められているとも言われているが、はっきりしない。はっきりしないというのは、気味が悪いものでもある。崇徳天皇の霊に敬意を表して、詳しい場所は書かないことにするが、読者諸賢は機会があれば自らの足で探し出していただきたい。

以上、崇徳天皇の怨霊に関わる史跡を訪ねてみたが、読者諸賢がこれらを訪ねる場合、崇徳天皇の祟りがすでに消滅したかは不明なので、何か災いがあったとしても、私は責任を取れないことをここに明記しておく。怨霊の存在は、もちろん証明されていないが、しかし、怨霊が存在しないとも証明されていないのであるから…。

（前中央診療所健康管理部長）

［エッセイ］

東京探訪記(9)

東京の地形と神田川

四元秀毅

2022年春、妄想に基づくロシアのウクライナ侵攻は世相をいっそう暗くした。私は「論語と算盤」を現代化して「理念と利害」という標語を考えたことがあるが、この戦争は“理念(自立)”のため“損害(死)”を厭わず闘う人達がいることを示した。次元は違うが落語でもときに算盤勘定抜きで行動する人が登場し、「井戸の茶碗」がその例である。これは儒教的信念に基き自分の得を捨てて意地を張り合う侍の物語で、大団円に終わる人情噺である。一方、現実社会の戦は陰湿・悲惨でまことに嘆かわしい。

本連載では、前回、神田川水源の井の頭池周辺を眺めた。今回は池を産み出す東京の地形を簡単に紹介し、ついで紆余曲折して流れる神田川を下り早稲田界隈を巡ってみたい。

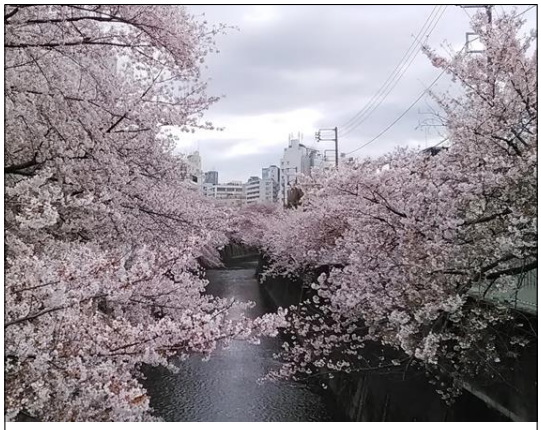


図１　北へ流れる神田川の春の風景
東中野駅北側にある小滝橋付近からみた春の神田川。ここでは川は早稲田方面に向かって北に流れる。
(2022年4月撮影)

「武蔵野台地」を東に向かう“神田川”

地形的にみると東京は西から「(関東)山地」、「(多摩)丘陵」、「(武蔵野)台地」、および「(東京)低地」で構成されており、井の頭池・善福寺池は西部東端の「武蔵野台地」にある。この地は多摩川が造った扇状地を基盤としこれに数～十数メートル厚の関東ローム層が堆積して出来ているが、そこにはいくつかの段丘すなわち“崖”がある。扇状地に滲み込んだ雨水は伏流水となり砂や礫を含む地層を流れて台地縁の“崖”に突き当たり、そこから湧きだして池を作るのである。“崖”には“国分寺崖線”、“立川崖線”や“70M・50M崖線”があり、後者は70・50メートル高の崖線を意味する。井の頭池は“50M崖線”からの湧水池で標高40M程度であり、池水はこの小さな高低差で隅田川までの数十㎞を旅するのである。

“神田川”の上流部分をみると、池から流れ出た小川は杉並区を東に走って中野区で善福寺川と合流し、その辺りから北に向かってJR中央線を潜り新宿区の早稲田に至る。図１は小滝橋近くの春の神田川で、この辺りは“かぐや姫”の「神田川」ゆかりの地でもある。

“雑司が谷”と“早稲田”などの近隣地域

図２は“雑司が谷”〈豊島区〉とその近辺(左下隅は“早稲田”〈新宿区〉、右側などは文京区)の図で、前回紹介した“本駒込”の西隣になる。雑司ヶ谷の地名の由来については、南北朝時代に宮中の“雑色（下級役人）の職”にあった者が土着したため、などの説がある。因みに“ゾウシガヤ”のように“谷”を「ヤ」と読むのは関東の方言のようで、縄文流発音かも知れない。東京では小さな起伏に富む地形を反映して渋谷、四谷、市ヶ谷など“ヤ”のつく地が多く、川はその低地を縫うようにして流れるのである。

図の上方・右方は小高くなっておりかつて寺社や屋敷などが多かった地域で、〈1〉は雑司が谷の“鬼子母神”である。武神の妻の彼女は超子沢山で栄養源確保のため人間の子供を食べて過ごしていたが、それを知った釈迦はトリックを使ってこれを諭し、改心した彼女は仏法の守護神（子供と安産の守り神）になったという。その右の〈2〉は夏目漱石などの墓がある“雑司ヶ谷霊園”でこの一帯はもと鷹狩りの場だったし、〈3〉の“護国寺”（文京区）の左方はかつて“百人組”（鉄砲隊）の居住地であった。この辺りは武力にも縁のある地域だったようである。

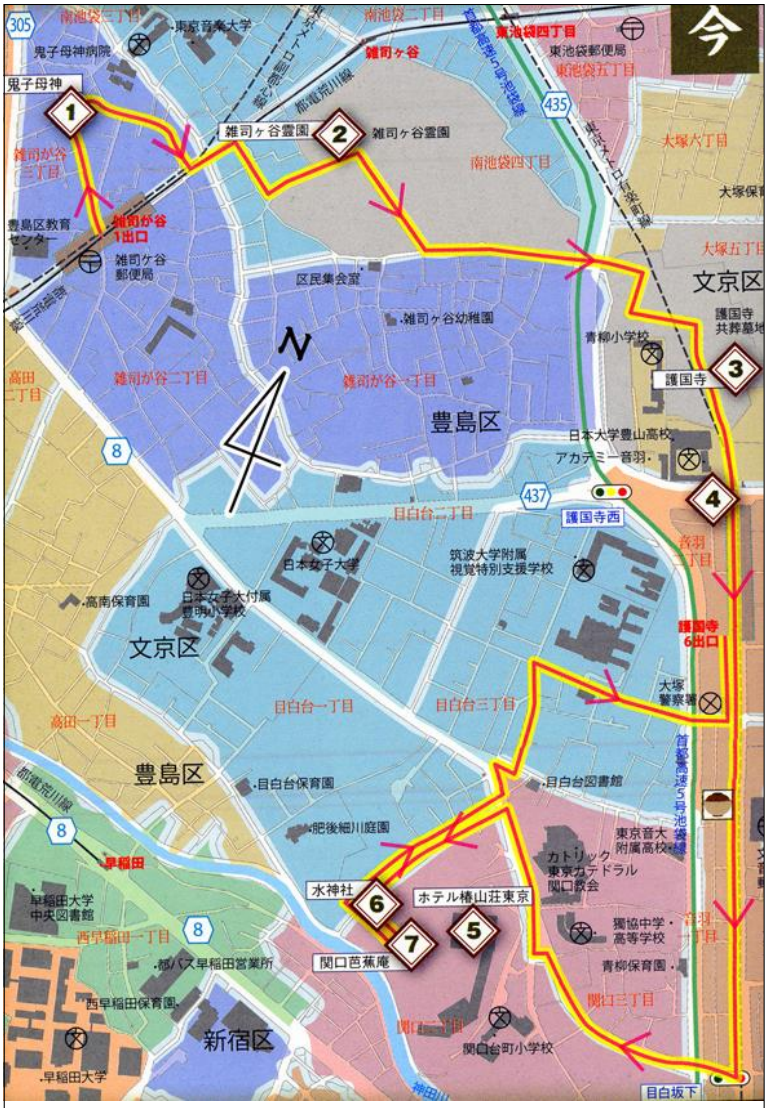


図２ “雑司が谷”と隣接地域
“雑司が谷”は江戸城の西北方向の地域で、左上の〈1〉は鬼子母神である。一方、左下隅には早稲田大学の一部が、その右には“関口芭蕉庵〈7〉”がみえ、その間を神田川が流れている。（江戸楽編集部「古地図で歩く江戸・東京；メイツ出版㈱〈東京〉2018年に依る）

“関口芭蕉庵”、そして“都電荒川線”

一方、図の左下隅は低地帯で、蛇行する“神田川”がみえる。川はこの辺りで向きを東に変え、御茶ノ水あたりを経て隅田川に注ぐ。その近くの〈7〉は芭蕉ゆかりの地“関口芭蕉庵”（文京区）である。彼は若いころ水戸藩による神田上水の分水工事を手伝っており（1677～80年；延宝５～８年）、そのとき住んだ水番屋は後にこのように呼ばれるようになった。上水の造設では適度な高低差を保ちながら吸水性が低くかつ硬すぎない箇所を選んで掘り進む必要があり難しい事業だが、芭蕉にはこの方面での若干の貢献もあったようである。

近くに東京都唯一の路面電車「都電荒川線」の終点“早稲田”の赤い文字があり、上方には旋回する路線もみえる。電車は台東区三ノ輪を出て荒川・隅田川の近くを通り、池袋などを経て約12㎞先のこの地に至るのである。

（国立病院機構東京病院名誉院長）

［追悼］

髙久史麿先生

泉　孝英

髙久史麿先生が、本年３月24日逝去された。享年91歳。

先生は、1931年、朝鮮総督府官僚を父として、朝鮮釜山にて出生。戦後、47年福岡県立小倉中学校４年修了、第五高等学校理科甲類に進み50年卒業、54年東大医学部卒。55年東大第３内科入局（冲中重雄教授）、60年「赤血球内遊離プロトポルフィン」により医博受領、群馬大助手（中尾喜久教授）、東大助手（中尾喜久教授）、米国シカゴ大留学、72年自治医大教授（中尾喜久学長）、82年東大教授（第３内科）、医学部長（88年～90年）、90年国立病院医療センター院長、93年国立医療センター総長、96年自治医大学長、2012年退任。日本医学会会長（2004～17年）の経歴を歩まれている。1971年ベルツ賞、94年紫綬褒章、2012年瑞宝大授章など受賞歴多数。

先生は、特に、平成期のわが国の医学・医療に大きな影響を与えた人物であったことは、先生の逝去に際して、日本医事新報5112号（2022年４月16日）が５頁にわたる以下の追悼記事を掲載されたことにも示されている。

・髙久史麿先生の御指導を受けて：矢崎義雄（学校法人東京医科大学理事長／元東京大学医学部第三内科教授）
・感謝：横倉義武（前日本医師会会長）
・髙久史麿先生を偲んで―髙久先生の懐の深さで実現した医学会の法人化：門田守人（一般社団法人日本医学会連合／日本医学会長）
・髙久先生のこと：浦部晶夫（NTT 関東病院顧問）
・髙久史麿先生を偲ぶ：永井良三（自治医科大学学長）
・お別れのことばにかえて：千葉　滋（筑波大学医学医療系血液内科教授）

髙久先生は、私にとってみれば天上人であるが、「ガイドライン」をめぐって、大論争をさせていただいだことがある。思い出として、事の次第を記させていただくことにしたい。

1990年前後から、欧米から数多くの「診療ガイドライン」が登場してきた。目的は「適切な医療と妥当な医療費の実現」である。

私自身、喘息の基本病態は気道の慢性炎症であること、したがって、喘息の管理・治療の基本は吸入ステロイド薬療法であることを明記した米国 NIH の「喘息の診断・管理ガイドライン」を1992年邦訳、出版した。診療ガイドラインのわが国における最初の導入であった。しかし、当時の医学界・医療界からは猛烈な反撃を受けた。理由は医療の標準化は医師にとっては「自由裁量権に対する制約」で、薬剤の有効性の明確化は製薬業界にとっては「営業妨害」以外の何物でもないことに映ったからである。1990年代の後半、厚生省も、ガイドラインに関心を持ち、各科領域におけるガイドライン作成を試みしたが、日本医師会が猛反対、厚生省の企画も頓挫の状況になっていた。

しかし、反対はあっても「ガイドラインがなければ、わが国の医療の向上はありえない」と考えていた私は、ある種の使命感をもってガイドラインの普及を目指しての活動を展開していた。

当時、『最新医学』という総合医学雑誌があ

り、高久先生は、井村裕夫先生とともに編集幹事、私は編集委員の一人として、毎年、編集会議に参加していた。この会議で、私は各科領域にわたるガイドラインの連載を提言・主張した。高久先生は『反対』。当時、私は若かったこともあり、医療の社会性、適切な医療と妥当な医療費を目指してのガイドラインの必要性を主張した。先生は納得されない、論は30分近くにおよび周辺の先生方はハラハラの事態となってきた。しかし、最後に先生は『ガイドラインのようなものを最新医学に連載すれば、僕は日本医師会に出入りできなくなるよ』。これで、私は提案を撤退した。

ガイドライン反対は高久先生だけではなかった。当時、私は東京の某医学出版社と『ガイドライン・シリーズ』を企画していた。その話を聞き付けたK大のS内科教授が「ガイドラインの本を出版するならば、今後、K大の先生方はお宅の出版物に一切協力しない」と強談判があり、出版社はお詫びして企画は取りやめとなったこともあった。

このようなこともあったが、私自身は、日経メディカル開発の理解を得て、年刊本『ガイドライン外来診療』の刊行を2001年に開始、2020年版まで刊行することができた。

高久先生とは、このような経緯もあったが、2012年12月に私が『日本近現代医学人名事典1868～2011年』を刊行した際には、以下のような立派な書評をいただいたことを記しておきたい。

書評

日本の近代医学の歴史を語る貴重な資料

評者：高久史麿
日本医学会長・自治医大名誉学長

今回，医学書院から泉孝英先生の編集による『日本近現代医学人名事典』が刊行された。この事典で紹介されている方々は，2011年末までに死去された医療関係者の方々である。紹介の対象になっているのは医師，医学研究者が大部分であるが，歯科医師，看護師，薬学，体育指導者，宣教師，事業家（製薬業），工学者（衛生工学），社会事業家，厚生行政の方，生物学者など，幅広い業種の方々であり，いずれもわが国の医療の発展に大きく貢献された方々である。本書に紹介されている方々の年代は誠に長く，1868年から2011年までの143年に及び，その数は3,762名に達している。

本書の「序」にも紹介されているように，1868年はわが国に西洋医学が導入された年であるから，本書は，日本の近代医学・医療に貢献された先達のご経歴とご業績を網羅した“一大人名事典”であるといって過言ではないであろう。

この書評を書くにあたって，私自身が指導を受けた20人近くの恩師の方々の名前を拾い上げてその内容を読んでみたが，その内容の正確さに強い感銘を受けた。なお，この20人の方々の各々のご業績の紹介に関しては，その内容にやや濃淡があるように感じられたが，これだけ多くの方々の紹介であるからこの程度のばらつきはやむを得ないであろうと考えている。

泉孝英先生が胸部の疾患をご専門にされておられたことは，先生が京都大学の教授の時からよく存じ上げていたが，先生がご退官後14年間かけて本書の編集にあたられたことを本書の「序」で知った。医学者としての泉孝英先生しか知らなかった私にとって，大きな驚きであった。あらためて泉先生の本書の編集に対する甚大なご尽力に心からの敬意を表すると同時に，泉先生のご努力が本書を日本の近代医学の歴史を語る貴重な資料にしたと私は考えている。

このような貴重な資料の作成に成功された泉孝英先生ならびに医学書院の方々に衷心からお祝いの言葉を捧げるとともに，１人でも多くの方々に本書を貴重な資料として温存していただきたいという私の願いの言葉をもって，推薦の言葉の締めくくりとしたい。（週刊医学界新聞3047号，2013年10月）

［新しい時代を紹介した本］

ぜんそくはもう怖くない

中島明雄 訳

光文社 1993年

喘息に対する吸入ステロイド療法は、今やわが国ではだれしも認める有効な治療法である。しかし、30年前にはそうではありませんでした。本書は、わが国における吸入ステロイド療法の導入者である中島先生が、喘息患者に向けて吸入ステロイド療法を呼びかけた歴史的訳書である。

当時の状況を知るために、「監訳者まえがき」を転載させていただくことにしたい。

ぜんそく研究の世界的権威であるカナダのニューハウス教授と英国のバーンズ教授が、ぜんそく患者とその家族向けに執筆されたこの本を、日本語でも読めるようにしようと計画した理由を記したいと思います。ひとことで言えば、患者さんに、自分のかかりつけのお医者さんに対して、「先生、私にも吸入ステロイド薬をためしてみてください」と言ってもらうためです。

ぜんそくの治療は、以前は、たいへんやっかいなものでした。極端なことを言えば、発作や呼吸困難が過ぎ去るまで、患者さんはただがまんにがまんを重ねるたけ、といってもよいほどだったのです。内服のステロイド薬(プレドニゾロン)がぜんそくによく効くことは、分かっていました。しかし、なるべく服用しないようにとがまんしたのは、この薬をのみ続けると顔にむくみが出たり、糖尿が出たり、骨粗鬆症という骨がもろくなる病気まで起こす心配があったからです。

吸入用のステロイド薬が開発されてからは、事情は一変しました。ステロイド薬の吸入療法は、内服と同じように、あるいはそれ以上に有効というだけでなく、薬剤の量がはるかに少なくてすみます。そのため、プレドニゾロンの服用にさいして懸念される副作用は、めったに出現するものではないこともわかったのです。最近では、10年以上使用しても副作用は少ないことが確かめられた、との報告も行なわれるようになってきました。ステロイド薬の吸入療法は、欧米では10年ぐらい前から急速に普及し、ぜんそく（とくに慢性ぜんそく）にはステロイド薬の定期吸入が常識となってきています。この治療法を行なえば、ぜんそく患者のすべてとは言いませんが、7～8割以上の方は、健常人と同じように学び、働き、遊ぶことができるようになりました。

欧米のぜんそく患者に有効な治療法は、日本の患者さんにも有効なはすです。ところが残念なことに、わが国では、ぜんそくに対するステロイドの吸人療法は、ほとんど普及していません。吸入ステロイド薬の売上げ金額を国民一人当たりにしてみると、日本での売り上げは、英国やデンマークの１パーセント（10パーセントではありません！）という極端な少なさです。

なぜ、このようなことになっているのでしょう。一つには、先にも述べたように、医師、患者ともにステロイド薬の“副作用恐怖症”になっていることがあろうかと思います。しかし、内服に比較するならば、副作用ははるかに少なく、「ない」といってもいいくらいなのです。そして、根本的な問題は、日本では、ぜんそく治療におけるこのステロイド吸人のすばらしさを知らない医師が多いということです。加えて、この薬があまりにも売れないため、製薬会社もあまり熱心には宣伝しない（できない）ことも、普及度の低い理由だろうと思います。

あなたがぜんそくに悩まされているなら、あるいは家族にぜんそく患者がいるなら、主治医からもらっている薬のなかに、吸入ステロイド薬が入っているかどうかを調べてみてくたさい。なければ、先生に相談してみてください。吸入ステロイド薬を使えば、おおかたの患者さんはすばらしい効果が得られ、学校や職場、遊びの場での活動に積極的になれることでしよう。また、あなたの担当の医師もステロイド薬の吸入療法のすばらしさを知ることにより、あなた以外のぜんそく患者に、この療法をすすめ、多くの方々に明るい生活が約束されることにもなるはずです。

この本の訳者である中島明雄先生について、少し紹介しておこうと思います。私がぜんそくにおける吸入療法のすばらしさを知ったのは、1988年の冬、北欧の病院を訪ねたときでした。これはたいへんな進歩だと驚き、わが国にも導入しなければと思って帰国してみると、すでに中島先生が吸人療法を下関で実践されていたのです。以来、中島先生には私どもの研究所の非常勤講師になっていただき、ぜんそく治療についての共同研究を進めています。

中島先生は、英語に堪能な方です。私がこの本でした仕事といえば、読者に少しでも分かりやすく読んでいただくための、わずかばかりの努力にすぎません。

題名のとおり、ぜんそくは、もう怖くありません。安心して学び、働き、遊ぶために、この本がいささかでもお役に立ち、日本のぜんそく医療の向上につながることを期待しております。

1993年４月

泉　孝英

中島明雄　なかしま・あきお

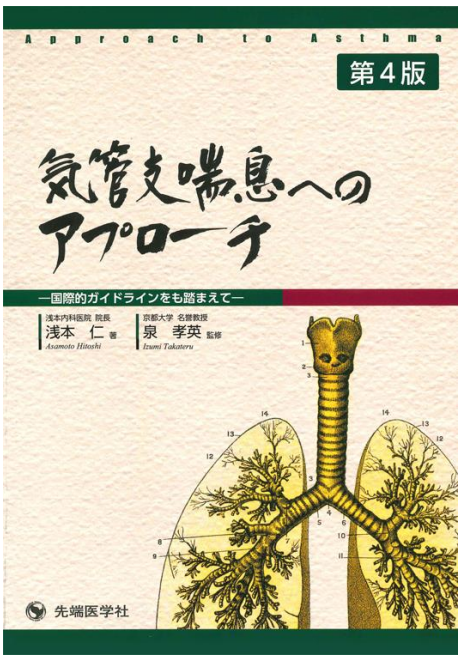
昭和23(1948)～平成29(2017)年(68歳)、山口

【呼吸器内科】 昭和49年山口大卒。実地修練。第２内科入局(三瀬淳一教授)、52年済生会下関総合病院、豪留学(55年1月～56年1月 メルボルン・ベーカー医学研究所)、59年９月「慢性肺疾患患者における吸入気酸素濃度による肺内シャント率の変動 従来のシャント率と補正シャント率との比較」に対して山口大より学位(医博)受領、米留学(平成元年６月～７月 ペンシルベニア州立大研究所)、７年１月下関市にて開業。▽わが国における喘息に対する吸入ステロイド療法の導入者。

[訳書]ぜんそくはもう怖くない 安心して学び、働き、遊ぶために(ニューハウスほか 平5)[共訳]喘息の診断・管理 ＮＩＨガイドライン(ＮＩＨ 平18)

（日本近現代医学人名事典 別冊 1868～2019, 医学書院, 2019）

新刊紹介



浅本　仁 著
泉　孝英 監修
先端医学社 2022年
定価 4,950円（本体4,500円＋税10％）

本書の著者、浅本　仁先生は、1967年京都大学医学部を卒業、大学院を経て、1970年から2002年まで国立京都病院に勤務、呼吸器科医長を経て、京都の伏見区に浅本内科医院を開設され、以来20年、気管支喘息を中心に地域医療に従事されてきた先生である。国立京都病院勤務中の２年間、豪・メルボルン大学の免疫研究所に留学されている。

浅本先生が、今般『気管支喘息へのアプローチ』と題されたＢ５版、310頁に及ぶ大冊を刊行された。監修者として、勉強させていただいだいた立場から本書の紹介をさせていただきたい。

本書『気管支喘息へのアプローチ』は正確に言えば、『気管支喘息事典（気管支喘息のすべて）』である。しかし、これだけの冊子が簡単にできるわけではない。本書の第１版を1993年に、第２版を1997年に、第３版を2006年に、そして“本書”第４版を2022年との歴史があってのことである。

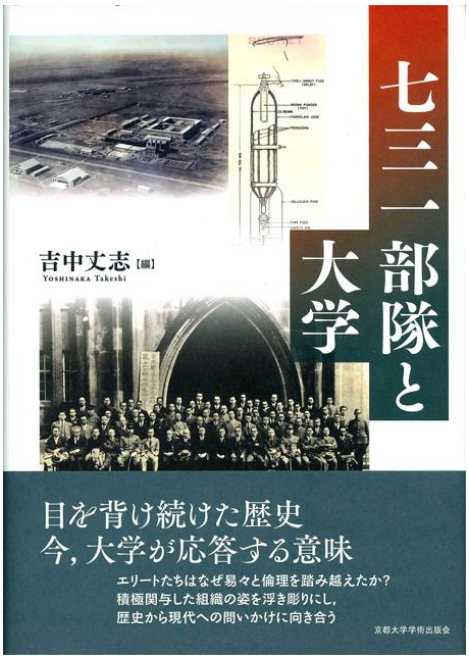
本書の副題に「—国際的ガイドラインをも踏まえて—」とあるが、この副題こそ浅本版の評価されるところである。少し詳しく説明しておきたい。

“気管支喘息の管理・治療の基本は吸入ステロイド療法”の概念が確立して、以後、1990年前後から、世界各国、また、国際的に喘息ガイドラインが刊行され、版を重ねてきております。しかし、ガイドラインはevidence-basedを基本とするだけに文献の集約的記載が中心となっており、編集者が喘息医ではない先生方が加わっておられるだけに、“痒いところに手が届く感”には欠けるところがあることは日常臨床で、しばしば感じているところです。

しかし、この浅本版は、先生の喘息患者から得られたところを成書としてまとめる過程において、常にガイドラインの記載を参考にされていることが実感される内容となっています。簡単に言えば、難しい記載のガイドラインを読まなくとも、「本書を参考にすれば日常の喘息治療は完璧」と言えると思います。

軽症例に対する吸入ステロイド薬の指導法から、難治性（重症）気管支喘息に対する生物学的製剤の使用法に至るまで、わかりやすく説明されている「喘息本の決定版」として紹介させていただきます（泉　孝英）。

新刊紹介



吉中丈志 編
京都大学学術出版会 2022年
定価 3,600円（税別）

〈編者のことば〉

京都大学は湯川秀樹氏以来ノーベル賞受賞者を多く輩出した大学である。医学部では山中伸弥、本庶佑両教授が受賞されている。グローバル化の下で科学技術の進歩と社会との調和は切実な課題であり、未来を志向するために積極的な発言が期待される。

そのためには歴史を振り返ることが欠かせない。歴史には光もあれば影もあるから、型にはめこまないオープンな形で振り返ることが大切だ。それは、ナンバーワンではなくオンリーワンであることを自負してきた京都大学こそが成し得ることではないか。

医学部創立百周年記念アルバム（近衛無番地京都大学医学部発行2004年）の中で本庶佑氏（当時医学部長）は、「百年の近代日本社会の激動と共に揺れながら発展した京都大学医学部の歴史は具な検証に値する」と述べた。「混迷の中で目標を見失いつつある者にとっては、先達の苦闘の姿を見て、沈思黙考することから次の百年の目標を見出す示唆が得られる」が、「残念なことに資料の関係もあり、京都大学医学部と戦争の関わりについての掘り下げは誠に不十分である」として残された課題を指摘した。

京都大学医学部と戦争とのかかわりの中心にあるのは731部隊であろう。しかしこの問題は京都大学医学部だけでなく、日本の医学界、医療界においても、戦後長い間タブー視されてきたという経緯がある。筆者は2009年から 4 年間京都大学医学部で731部隊を取り上げ講義した経験があるが、731部隊を知っている学生は２割に満たないのが現実であった。731部隊に言及した医の倫理のテキストはほとんどなく適切な教材にも乏しい。

新型コロナ感染症はスペイン風邪を、ロシアによるウクライナ侵攻は日本の中国侵略を想起させた。この時期は国際連盟や国際保健機関が設立され、パリ不戦条約が締結された時期に当たるが、第二次世界大戦を防ぐことはできなかった。日本医学会が「ロシアによるウクライナ侵攻に関する緊急声明」（3月1日）を出すなど新たな変化があるが、社会の動きを見る限り歴史から教訓をくみ取る営為はなお重要である。

本書では多彩な学術的切り口から負の歴史に迫ってみた。次世代の医師、医学研究者が歴史を踏まえて社会との対話を進める基盤形成の一助にしたい。歴史を振り返る窓口を広げ、京都大学が他に類を見ない未来を拓くパイオニアたることに貢献したい。

（公益社団法人京都保健会 理事長）

公益財団法人 京都健康管理研究会
住所：〒604-8111 京都市中京区三条通高倉東入桝屋町57番地 京都三条ビル401A号
電話：075-746-2123（火・水・木・金の10～15時）
FAX：075-746-2092 E-mail: info@kyoto-f.com https://www.kyoto-f.com

〈 事業案内 〉

1．研究助成 1件 100万円まで
2．海外留学助成 1件 120万円（／年、2年間まで）
3．海外で開催される国際学シンポジウム等への出席経費の助成 1件 25万円まで
4．難病患者団体（京都府下在住）の活動経費助成 1件 50万円まで
　1～4の2023年度の公募は2022年10月1日～11月30日の予定です。詳細はウェブサイトをご参照ください。
5．学会・研究会・運営経費の助成（1件 50万円まで）：受付は随時
6．医学・医療にかかわる書籍の刊行・刊行助成（1件 100万円まで）：申請は随時
　5～6の詳細はウェブサイトをご参照ください。
7．市民健康講座：2022年7月3日(日)開催、11月13日(日)開催予定
8．医療相談事業、医療教育講座事業
9．季刊誌「健康塾通信」：1月15日、4月15日、7月15日、10月15日に発行予定

2022年5月20日 理事会 令和3年度第69期 事業概要、決算報告他
2022年6月4日 評議員会 令和3年度第69期 事業概要、決算報告
小林 榮、近藤久人、戎野久子、近藤美佐子、島 式子、野村一枝（敬称略）
上記の方々より本財団活動支援の御寄付をいただきました。

■市民健康講座：2022年7月〈開催報告〉
みんなで学ぶ健康学 ～眼科編～
目の老化や病気を理解し、適切な対応と治療法を学ぼう
講師：上野盛夫（京都府立医科大学眼科学講師）
日時：2022年7月3日(日) 13:30～15:45
会場：メルパルク京都 7階
主催：大阪よみうり文化センター
　来場者数 101名

■市民健康講座：2022年11月〈予定〉
「高齢者の咳にまつわる話」
講師：長井苑子（一般財団法人大和松寿会 中央診療所 所長）
日時：2022年11月13日(日) 13:30～15:30
会場：TKP京都四条駅前カンファレンスセンター（地下鉄13番出入口直結）
　〒600-8006 下京区立売中之町100-1 四条KMビル8F（四条堺町北東角）
主催：大阪よみうり文化センター

健康塾通信をお読みいただける方は、「郵便番号、住所、氏名」を御記載の上、財団FAX 075-746-2092 あるいは E-mail: info@kyoto-f.com にて御連絡下さい。郵送させていただきます。